

**横須賀市教育振興基本計画策定のための
団体等ヒアリング調査報告書**

**平成 22 年（2010 年）7 月
横須賀市教育委員会**

目 次

1 調査目的および実施方法等	1
2 調査結果	2
(1) 横須賀市立小学校校長会	2
(2) 横須賀市立中学校長会	11
(3) 三浦半島地区教職員組合	17
(4) 障害者施策検討連絡会	24
(5) 横須賀市PTA協議会	30
(6) 生涯学習センター・コミュニティセンター利用者	35
(7) 図書館ボランティア関連団体	43
(8) 横須賀市スポーツ振興審議会	49

1 調査目的および実施方法等

(1) 調査目的

教育振興基本計画（平成 23 年度から平成 33 年度）の策定にあたり、現状の課題や要望などを把握し、計画策定および今後の教育施策の展開の参考とするため、本調査を実施する。

(2) 調査団体等

- 横須賀市立小学校校長会
- 横須賀市立中学校校長会
- 三浦半島地区教職員組合
- 障害者施策検討連絡会
- 横須賀市 P T A 協議会
- 生涯学習センター・コミュニティセンター利用者
- 図書館ボランティア関連団体
- 横須賀市スポーツ振興審議会

(3) 実施方法

各団体等の構成員 5～10 名程度が一堂に会した会場で、当該団体等ごとに設定したテーマに基づき質問し、自由に発言する「グループインタビュー形式」により実施した。

（＊生涯学習センター・コミュニティセンター利用者を除く）

(4) 実施時期

平成 22 年 2 月 3 日（水）～平成 22 年 3 月 29 日（月）

2 調査結果

(1) 横須賀市立小学校校長会

日 時 平成 22 年 2 月 16 日 (火) 午前 11 時から午前 12 時

会 場 教育委員会会議室

テーマ 本市の教育について

1 教員の多忙化について

- ・課題としてまず教員の多忙化がすごく出ている。非常に夜遅くまで若い教員が残って仕事をしている。
- ・今までの教員は仕事を家に持って帰れたが、PCが導入されて、IT化が進んでいくなかで、仕事を家に持って帰れなくなり、学校に遅くまで残っている現状になっており、課題となっている。
- ・団塊の世代が大量に退職し、経験の浅い教員が増えてくるということは目に見えている。いかに教育技術的なものを継続していくか、若い教員を育てるのかというのは、学校現場からみると大きな課題である。しかし研修を増やせばいいという話ではなく、研修を増やしましょうという方向にはしてほしくない。それでは、多忙化に拍車をかけてしまう。もっと校内で育てる仕組みを充実させる必要がある。教員を学校のなかで育てるということをもっと強く打ち出していく必要がある。
- ・何か新しいものを増やすと、どんどん1人にかかる仕事の量が多くなってしまって、ゆとりがなくなってしまい、一つ一つに手が届かなくなって、色々と問題も出てくるので、何かを始めるなら、その分、何かを取り除いてもらわないとどうにもならない。
- ・新しいことを始めるなら、今までのことを整理していかないといけない。〇〇教育、〇〇教育などが、たくさん出てくるが、行っていることはあまり変わっていない。新しい取り組みとなると、それについて、年間計画や校内で担当を決めるなどが出てくる。担当が頑張り、みんなが頑張ると、一杯一杯になってしまう。横須賀市は何をどうしたいかを明確にし、それに対してどうしたいのか、学校としてどう力を入れていくのかを考えていかないといけない。小学校では、教員数が少なく、年次休暇を取る、何か事件があると回らなくなる。プラスアルファの部分は、放課後の時間などだけで行っているところもあるので、整理できる部分を教育委員会のなかで整理していただくと、もっと楽になる。

- ・教育委員会の各課にとっては一つのことで、学校にとっては色々な部署からたくさんくることになってしまう。
- ・以前に調査の合理化を行っていただき、非常にありがたかったが、調査だけではなく、教育の中身についても精査してほしい。
- ・教育の前に付く言葉が、最初2文字だったのが、4文字、6文字になったりしている。それらを列挙して、上位10個くらいにしぼってもらえると整理できる。
- ・〇〇教育というのを学校の実態に合わせて、取り組めるところに取り組んでくださいと言ってくれるといい。

2 不登校対策、支援教育について

- ・人的資源も大きな要素で、支援教育、地域の教育力も含めた学校のなかで、現在は40人学級だが、例えば1年生40人を教員1人で相手にするのは、至難の業である。1か所で問題が起きると、後は全員がほったらかしに近い状態になってしまう。1クラス30人強の状況でも、若い教員などは対応に困ってしまうので、地域で教育ボランティアをお願いしている。来れるときに、とにかく来てもらって、1年生と話すことや、トイレの世話などをさせていただくという形で、お願いしている。
- ・神奈川県で支援教育という言葉を使っている意味は、発達障害のある子どもだけではなくて、生活習慣に慣れていない、人間関係を作れない、通常の子どもが増えており、そういった子どもたちが、学校の集団生活に慣れさせるための支援をしていくということである。そのためには、人的資源が必要で、教員が加配されないのであれば、市費で介助員の人数や配置時間数を増やすなどでもいい。現在、介助員は、1日4時間程度の予算のため、午前中で帰ってしまう。子どもは給食を食べて午後までいて、午後の方が子どもは疲れてくるので、非常に落ち着きがなくなってくる。支援に関わる人的資源というのはこれからの教育を支えるうえで非常に大事なキーポイントになってくる。横須賀が独自で行えば、県内の他市町村に向けても、特色ある市の教育ということで、ある意味売り出せる部分だと思うし、大事な施策になるかと思う。
- ・支援を要する子どもは年々増えている、その対応は大きな課題である。
- ・校外学習の時などは、介助員だけでなく、付き添いの人が、小学校には本当に足りないため、どうやって人をやりくりするかでいつも悩んでいる。ぜひ人を配置してほしい。
- ・人員の話について、小学校では、大人がたくさんいるということが必要。教員免許があってもなくてもいいので、改善策として、大人がたくさん学校にいた方がいい。非常勤

講師1人分の予算で、介助員や臨時職員なら約3倍配置できる。そういったことも具体的に施策をするときには小学校としては効果があると思う。

- ・横須賀の課題になっているいじめや不登校の問題も、解決策には、人的配置が必要になるかと思う。

3 横須賀の教育の特色について

- ・横須賀の教育の特色といったときに、横須賀の教育目標みたいなものがあつた方がいいのではないか。重点課題ということでは示されているが、もうひとつ上の教育目標みたいなものが必要ではないか。他市でも教育目標という言葉が出てくる市もある。それがあれば、重点的に予算をつけていくというところにもつながるのではと思う。特色ある教育の推進というのを、各学校で出していくのもいいが、横須賀市ではこうという形でも示した方が市民にはわかりやすいかなという感じもしている。総花的なものでなくて、ある程度限定していくことも、10年間程度の期間だったら必要ではないかと思う。
- ・人的な部分にも関わってくるが、学校教育課から学生ボランティアの件で、一時期学生がなかなか集まらなかったが、もう1回復活させていくということで話しがあつた。学生ボランティアについては、文部科学省のパイロット事業として行った経験があるが、1回学生が来たら1,000円を支給し、何回来ても平気であるということで行っていた。現在は、学校いきいき予算のなかで、私の学校では、1回学生が来ると500円を支給する形で行っているが、そこから給食費を引き、交通費も学生が出さなくてはいけないので遠い所から来た場合には、マイナスになってしまうことがある。そういう点を解消すれば、学生は集まってくると思う。
- ・例えば、私立の大学などで教員免許を取る場合に、自分の母校に行つてお願いをして、教育実習受けてもらえるか、受けてもらえないかということがよくある。ボランティアで来ていれば、教育実習は引き受けるということにすると、学生のツテで情報が広がり、特に地方から来ている学生は、実家に帰らなくて済むから喜ぶ。そういうのを横須賀の特色にすると学生も少し集まるかと思う。学生の交通費があまりかからない近場の大学をプッシュしてもらうのもいいかと思う。
- ・英語活動はすごく良い。1年生から取り組んで、ALTも非常に一生懸命やってくれて、本当にいい教育が出来ている。
- ・1人1台PCが用意されたことも良い。横須賀の特色だなと思う。ただし、個人情報の部分で規制が強くて、動きづらいというところが出てきているので、それは今後の課題

である。

- ・外国籍児童が多いのも横須賀の特徴かもしれない

4 地域との連携・家庭教育について

- ・地域との連携はすごく大切であるが、地域の行事等への案内が管理職あてにたくさんくる。地域との関係は大切にしているので、なるべく出席するようにはしているが、非常に数が多く、負担になっている。部会のなかでは、そういう行事を洗い出して、部会内の小学校・中学校で、分担をとという話も出ている。
- ・学校は交際費が減っているため、地域の行事等に出す交際費がないが、他の団体などが交際費を出している関係で、言われることがある。交際費が減ったときに、総務課から行政センターや各町内会などに情報を流したが、人が変わると引き継ぎがうまくできていない部分もあるので、総務課から行政センターや町内会に学校はこういう状況だという情報を常に流せば、そういったケースも少なくなると感じている。
- ・教員が、一番苦勞しているのが保護者への対応である。もっと家庭教育を充実させていく、そういう面から取り組んでいってもらいたい。家庭が変わらないといくら学校で頑張っても子どもは育たない。それは教育委員会の仕事ではないかもしれないが、やはり家庭教育というか親をどう育てていくかということは大きな問題である。
- ・家庭の教育力の充実が必要である。特にマンションなどでは顕著だが、家庭が孤立している。隣の人の顔もわからない、あいさつもしない。そういった状況のなかで、子どもたち、地域の結びつきを高めるまたは家庭の力を強めるような拠点がない。昔は、その役割を町内会・自治会・子ども会などが行っていてくれていたが、そういった組織の力が弱くなっている。そういう部分への支援についても大事だと思う。
- ・民生委員が高齢化していて、対応できないためにやめていく方も多し。その代わりになるような人という、やはり同じような年代の人である。住民が、困ったときに相談できる、困ったときに助けてくれる、そこで話せばいろいろな情報交換ができるような、そういう拠点がほしい。それは町内会や自治会だけにお任せではやっていけない状態である。特に核になってほしいのが中年の人。もちろん土地で色々な商売をやっている人は、なれるのだけれどもそれだけでは少ない。会社に勤めている人などが圧倒的に多いので。そういった働き盛りの人たちも拠点に加わるような施策がほしい。そういう施策に予算を使っていかないと地域や家庭は崩れる一方で、そうすると全てが学校にきてしまう。

- ・町内会でも役員をやる人がいないことや、子ども会で出かけたときに、保護者からクレームがあったなどして、どんどんとやってくれる人がいなくなり、子ども会がなくなってしまうなどのことがある。
- ・地域に、子どもを育てるといふ部分が薄くなってきている。
- ・祭りのときなども、地元の若い人が神輿を担がずに、結局、外部の祭り好きの人を頼りだりもしている。まちづくりの部分で対策が必要。
- ・子どもを育てるときには、学校と地域と保護者だけではなくて、いろいろな大人の目が必要。例えば、関係機関など。児童相談所に学校から電話しても、こちらが思うようには動いていただけない部分もある。なぜかという児童相談所の担当が、案件を抱えすぎて、対応できなくなっているから。人員を増やすなど、そういう部分にもっとお金をかけてもらいたい。そうしないと益々親も学校も大変になってくる。
- ・地域との連携について、防災計画的なものが全然進んでいない。学校は、避難場所になっているので、地域と学校でうまく話し合っ、計画を立てなさいと何年前に市から話があったが、全然進んでおらず、ここで大きな災害がきたらどうになってしまうのだろうと、心配をしている。そのあたりをもっとしっかりと進めていかなければいけない気がする。
(⇒今年度、市で地域防災計画の改訂(平成 22 年度～)を行っており、行政が中心となって、検討組織を作り、学校と地域と入っていただき、一緒になって計画を立てていこうということになっている。)
- ・学校と地域との防災計画については、地域によって進捗状況や関心度が違う印象がある
また、防災関係の行事で、学校での宿泊を伴うものがあり、管理職対応をしている場合があるが、宿泊の必要性には疑問を感じる。また、そういったことも含め、行政や消防の催しには、人集めの意味合いが強いものが多いように感じる。
- ・地域と関係して、学校の安全面からのことで、防犯カメラが付いたのはいいが、人的な配置も考えてほしい部分がある。各学校には、名称はそれぞれ異なるが、見守り隊・パトロール隊などがあり、地域の方が色々動いてくれている。そこに予算をつけて、学校の周辺のパトロールや正門付近への人の配置を考えてもいいのかなと思う。そういう取り組みによって、防災・防犯・地域の子どもの守ることにつなげていける。現在は、地域のボランティアの方は無償でやってくれているので、申し訳ない。予算をつけて、お願いすればやってくれるのではないかと思う。
- ・パトロールを行っていただく場合などに、暑い季節には、冷たい飲みものを提供するま

たは備品を提供する、そういったことをするだけでも、大きく違うと思うので対応が必要ではないか。

- ・地域のなかにある学校という意識を、学校も持つし、地域も持っている。持っているからこそ、もう少し予算的な対応がほしい。
- ・現在は、ボランティアの調整役を教頭が行っているが、ボランティアのなかから、コーディネーターを務めてもらって、学校のニーズと、地域の人で学校に関わりたい方の仲立ちをしてくれるとかなりスムーズになる。他都市の小学校では、そういった事例もある。地域の人が、コーディネーターを務め、学校の中に事務局として部屋を設けていて、学校は今度こういう授業をやるので、こういう人が何人ほしいです、やってもらう内容はこうです、というのを伝える。そうしたら、今度は登録している人に連絡して集めるなどしている。
- ・コーディネーターの仕組みがあれば、理科の支援員などもすぐ集まるのではないか。
- ・地区によっては、地区のボランティアセンターが見守り隊や校内巡視もしてくれているところもある。
- ・今のボランティアは自分の持ち出しになってしまっている。プラスマイナス0というところのボランティアを学校も地域も市役所でも確認し、そうなれば、予算が当然必要となる。それで効果があれば、それほど大きな額にはならない。活用の仕方である。
- ・家庭教育の話で、地域の人たちは、家庭の教育というよりも、何かあると学校へと原因を求めてくるようになってしまっている。

5 学校の環境整備（ハード面）について

- ・学校の教育環境の整備が大きい課題である。学校の建物は、築 30 年前後がかなり多く、外壁・内壁がぼろぼろで、ひび割れも多い。なかには、雨水が壁面のコンクリートのなかを流れていて、コンクリートの成分が流れだしてしまい、鉄骨がさびているようなところもある。そういった状況では、耐震工事を施しているといっても、大地震がきたときに、壁面が持つのかという心配もある。
- ・トイレについて、一系統は改修が実施されているので、ゆったりしている、きれいなど、子どもにも保護者にも非常に好評である。ところが、古い、昔ながらのトイレについては和式がほとんどである。今の子どもは、ほとんど和式を使わず、洋式を使う。だから子どもたちに就学説明会のときに、和式トイレに慣れさせてくれ、というお願いをしているが、それでも失敗が多い。そういうことも含め、トイレについては、保護者から、

また学校としてもトイレの改修は非常に要望が多い。

- ・安全施設面で、防犯カメラが2台されたが、門が全て閉まる学校はいいが、門が閉まらず、どこからでも入ってこられる学校では、2台では全然対応できないなどの問題があるので、学校のニーズに合わせて設置してほしい。
- ・防犯カメラ、校内LAN、JCOMについて、線を別々にひかないで、ビデオカメラをWEBカメラにすれば、線をちょっと伸ばすだけでできたのではないか。
- ・防火扉が故障した場合など、費用が大きくて、学校の配当予算では直せない。防火扉、火災報知機など消防設備は、学校に配当される小破修繕からは外して、教育委員会で予算を持つなどしてほしい。
- ・毎年業者が変わると、点検のポイントが変わる。それぞれの業者で点検するポイントが大きく異なる印象がある。3年間くらいは、同じ業者に請け負わせ、点検に責任を持たせた方がよい。

6 教育予算について

- ・教育に関する予算をもっと増やしてもらわないと、何をするにしてもできないのではないかと思う。教育予算のなかで削れるものはほとんどないはずで、それを少なくしていくということが問題、反対に増やしてもらいたい。人を増やす、何かを直す、何かをやるというのには、全てお金がかかるので、もっとしっかりと確保してもらいたい。それで、人員配置・人材育成のことにもつなげていかななくてはいけない。研修にしても旅費が必要だし、そういう予算を確保していかないとなかなか教育界は変わらない。
- ・学校予算のなかで、費目に別れているものを、簡単に振り分けることができるようにしてほしい。例えば、電気をこまめに消すなどで余ったお金を修繕に回せるようになど、それぞれの学校が工夫する。そうすることによって、電気代や水道の節減をこまめに行えば節約になって、修繕などに回る。そうすると教員も子どもたちも一生懸命に行うと思う。
- ・予算でいえば、特別支援学校と市立高校を除いて他市と同じような義務教育の予算割合にしてもらいたい。それを含めて教育予算が何%と言われても困る。横須賀市が特色として持っている部分について、予算が出張るのは当然のこと。設置義務のある小学校と中学校の部分がその分を被るというのは、本来の形ではないと思う。
- ・体力低下の問題をなんとかしなくてはいけないということで、スポーツテストに参加しようとなったが、テストを行った場合に、データ収集・分析・保護者や児童への投げか

け、などを教員が対応するのは無理。そうすると業者に委託することになるが、1人あたり200円かかる。結局、200円ならということで保護者から集めることになったが、それを学校独自ではなくて、横須賀市全体で委託したらもっと安くなると思う。

7 小中連携・幼小連携について

- ・小中連携を行っているので、中学生の教員が小学校に来ることがあるが、やはり小学校は教員の数を増やす必要性が高いと中学校の教員が言っていたことがある。
- ・小中連携が始まって、中学校との情報共有化が以前に比べて進んでいる。
- ・小学校に、新1年生が入ってくる場合に、昔は入学式のときに、校長が新入生のみなさん入学おめでとうと言うと、子どもたちはちゃんとあいさつをしたが、今はあいさつができない。幼稚園教育も楽しい幼稚園を目指したため、その教育の部分が欠けてしまっていて、その結果小1プロブレムみたいなことも出てきている。そこに危機感をいだいて、幼小連携ということで、幼稚園の指導要録を作って幼稚園に送る取り組みをしてくれたが、これはすごく良いことだから、抜けることのないように、ずっとやってもらえるとよい。
- ・外国籍の新入生が入るかを幼稚園に問い合わせする場合などでも、指導要録の取り組みのおかげで対応が改善された。

8 その他

- ・保護者対応の部分についても、ある程度言われっぱなしという現状が、学校現場としては非常にづらい。保護者は言いたいことを言うてくる。それに対して学校として強く出していない部分がある。ある程度、学校にも権利や権限、後ろ盾をしっかりと作るなどをしてもらわないと、いつまでたっても保護者対応は減るものではない。言いたいことはあるけれども、言うとさらにひどくなるため、言われっぱなしになる。そういったことの繰り返しなので、もう少し学校がしっかりとものをいえる体制をとってもらえるとありがたい。
- ・子どもの体力の低下も課題である。これから、高齢者を一杯抱える中で、支える人たちが弱かったら先行き不安。子どもたちの体力については、横須賀は、以前から課題であり、なんとかしていかなくてはいけない状況なので、学校だけでなく、市のなかでどういう風にしていくかも考えてほしい。
- ・PC関係について、家庭からのアクセスというのは今後、視野に入ってくなくてはいけ

ない。

- 家庭からのアクセスについては、前から要望しており、予算の問題をクリアできれば、実現可能とのことである。

(2) 横須賀市立中学校長会

日 時 平成 22 年 2 月 3 日 (水) 午前 10 時から午前 11 時

会 場 教育委員会会議室

テーマ 本市の教育について

1 教員の多忙化について

- ・学校が抱えている一番大きな課題は、教員の多忙化の問題である。
- ・世の中が変化するなかで、学校に要求されるものが以前と比較にならないほど増えてきている。しつけ、食育、環境問題など、教育という名前をつけて学校に実施が求められる。これは、家庭や地域で行っていたものである。
- ・地域の教育力の低下という言葉に表されるように、昔は生徒が学校外で何か悪い事をしたときに、地域で指導していたが、今は、家庭ではなく学校に苦情の電話が入るような状況で、学校への負担が増える流れが止まらない。
- ・多忙化とともに、困難な保護者への対応など精神的に疲れるものも少なくないので、より多忙感が増している。
- ・校務支援システムの導入についても大変ありがたいが、教員が机に向かえる時間が少ないこともあり、慣れるまでの間はより一層の多忙化に繋がるのではないかと懸念している。
- ・不登校の原因も多岐に渡り、教頭の複数制など人的な措置の一例だが、とにかく人手が足りない。
- ・授業、部活が終わって、夕方職員室に戻ってくると採点、その日休んだ子どもの家への電話連絡、保護者からの苦情の電話への対応、次の日の授業やHRの計画作り、不登校生徒についての相談などがあり、20時やそれより遅くかかること（勤務時間は、8時15分から4時45分）も日常的になっている。
- ・教科指導の面でも、昔と違った教育課程が増えている。例えば、総合的な学習の時間などは、教員が授業案を作らなければいけない。また、目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）により、授業中の見取りや整理の時間も増えている。新しい教育課程の内容や時間数の変更への対応、さらに授業力の向上を図るために大学教授や指導主事を招いて、授業研究なども行っている。
- ・若くても体調を崩してしまう先生も少なくない。その先生が休むことにより、他の先生

が代わりに授業をしなくてはならない。

- ・子どもと話しができる時間というのは、弁当・昼休み・部活の時間くらいしかとれていないように感じる。
- ・多忙化が進んできたきっかけの一つは、平成元年の学習指導要領の改訂により、それまでの相対評価から目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）に変更となったことにより、評価をつけるにあたり、より細かく日常的な整理や記録が必要となったことにより、始まったと思う。
- ・学習指導の他にも生活指導や部活動、その他の校務分掌の増加などもあるため、多忙である。
- ・多忙化を軽減するために、大学生の学校教育ボランティア（*学校教育課で登録し、本人の希望と学校の要望が合致した場合に学校へ派遣）を申し込んだが、中心部から離れた学校のため、応募者がいなかった。
- ・小学校と中学校では多忙化の内容は違う。中学校では、特に時間のかかるものに、生徒指導・部活動・進路指導などが、多忙化の原因となっている。
- ・市レベルでの対応は難しいと思うが、やはり人員配置が必要である。教員の定数見直しや1学級あたりの生徒数を減らすことで、今よりも子どもに目が行き届きやすくするなどの必要がある。
- ・学級数に対する教員の定数が決まっているため、1クラス減った場合に、1人ではなく、2人教員の配置が減ってしまう場合があり、授業の実施に苦勞するケースもある。国レベルでの改善により大々的な配置増が必要と考えている。
- ・多忙化の対策として、学校では制度の改正などはできないので、とにかく校内で努力をしている。管理職として、落ち着いた学校づくりに努めている。教員に生徒指導よりも学習指導に関われる時間を確保する、人で動かず組織で動く体制を作る、職員の報告・連絡・相談の体制をしっかりと作るなど。学校でできるのはそのくらいで、制度的なものや施設的なものは教育委員会にお願いしていかなくてはならない。
- ・教員の多忙化のなかで、教頭にかかってくる負担も大変大きい。

2 不登校対策・支援教育について

- ・訪問相談員が各校1名配置になり、大変効果があがっている。ただし、予算の関係で、金曜日に来られないので、金曜日来られるようにして一週間通して子どもに関わっていただけると、さらに効果があがると思う。

- ・訪問相談員は、学校に来られない子どもの家庭に伺って、子どもと話しをし、気持ちを学校に向けさせ、相談室で学習をし、最終的にクラスに行くというような形で、効果をあげており、拡充をしてほしい。
- ・不登校になりつつある子が、訪問相談員につなげることによって、教室に入れなくなったときに、そこに行けばよいという安心感が出てくる。居場所づくりが大切である。
- ・特別支援教育を進めていくうえで、コーディネーターの役割は重要であり、また労力が多い。コーディネーターの教員は、担任を持たない、時間数を減らすなどしたいが、校内の現状をみるとそれができない。そういう面でも人の配置が必要だと思う。
- ・以前に、特別支援教育に関する非常勤講師を配置していただいたが、予算の枠の関係で継続してもらえなかった。生徒や保護者はその先生に見てもらえることの期待が大きかったので残念だった。ぜひ恒常的な配置をお願いしたい。
- ・学力の向上や不登校対策につながるのではという観点で、現在、特別支援教育の視点を持って、生徒指導や学習指導に取り組むようにしている。
- ・不登校対策については、学校のある土地柄によって捉え方や取り組みも違う。復帰率がよくなったから成功したというだけでなく、幅広くずっと続けるべきである。
- ・学校に来られなくなるのには、いろいろな理由があるが、やはり勉強がわからないというのが多い。実際には、足し算やアルファベットが厳しい子もいる。そういった場合に、その子を取り出して、少しずつでも分る喜びを覚えるというのは大変有効である。学校教育ボランティアも利用しているが、その場合教員免許を持った人がより望ましい。

3 横須賀の教育の特色について

- ・横須賀の特色の一つとして、米軍基地の存在がある。国際教育特区の取り組みなども行っているし、英語教育にもっと力を入れた方がよい。小学校段階ではみんなあいさつができる、中学校段階では道を聞かれたら答えられるなどの目標を設け、そして、横須賀の子どもは英語を話せるという印象を与えられたらよいと思う。
- ・横須賀は、半島に位置しているためか、みんな仲良くという意識が強い。そのことは良い面といえるが、その反面として、スポーツなどで闘争力や競争力が弱いと指摘されることがある。受験校も市外へ少しずつ流れている。強み・弱みをよく把握して、取り組んでいかなければならない。
- ・学校数が24校で、連携しやすく、報告・連絡・相談も行きわたりやすい。

4 地域との連携について

- ・地域連携については絶対必要であるが、校内の教育活動とのバランスが大切である。
- ・地域連携の必要性についてはどの学校でも認識している。しかし、地域との連携をさらに進めなさいと言われても、地域の行事に出るということが、教員の多忙化につながっている現状を考えると学校現場としては考えなくてはいけない課題である。
- ・地域の行事については、懇親会等への出席も少なくないので、予算措置されていないなかで、参加する教職員に負担をお願いせざるを得ない状況があり、管理職としては苦慮している。
- ・取り組みというのは、基本的に継続されていくことが多いため、どんどんと上乗せされていき、教員や生徒が参加する行事やイベントも増えている。どこまで仕分けするか苦慮している。
- ・現在、学区外での活動があり、地域の方々にも協力をいただいている。それ以外でも昔から大変学校活動に協力していただいております、地域との関わりは大事にしていかなければならない。
- ・地域との協力関係を築いてくるなかで、相互理解が深まり、教員の多忙化の事情に配慮していただき、行事への参加等は少なくなった。施設の貸し出しや生徒の活動への参加については充実し、よい関係が築けてきている。

5 部活動について

- ・部活動は教育課程には含まれないが、新しい学習指導要領では、重要な教育活動であることが位置付けられた。部活動の面での支援も充実してほしい。
- ・部活動について、24校でよく連携しており、中学校体育連盟の会合などへ部活動顧問の参加率も非常に高く、まとまっている。
- ・一方で、小学校の地域スポーツは盛んだが、中学校では、顧問のなり手がいなかったり、顧問のやる気がなかったりという問題も出ている。教員が、競技経験のない部活などで子どもに期待され悩んでいたりと、また土日の休みがなかったりと問題も抱えている。
- ・部活動指導について、やる気があっても経験がないために指導力を発揮できないケースもあり、人事異動で部活動のことも考慮できないものかと考えたりもする。
- ・部活動は、土日の休みもなく行っており、手当は出ているがほとんどボランティアに近い。子ども達が心技体で成長し、成果をあげていく姿を見るのは教員の喜びであるが、負担になっている部分も大きい。

6 生徒指導について

- ・生徒指導担当者は、1校の問題を市全体の問題として捉えて、みんなで協力して行動連携を行っており、非常に機能している。
- ・その一方で、現場の教員の数は限られており、生徒指導の心得がまだ十分でない教員が、持っている授業数が少ないという背景で、担当せざるをえない学校もある。
- ・一人の問題傾向の強い子どもによって、教員が頑張っても、学校が大きく荒れてしまつて、機能しなくなる。そういう場合に生徒指導の特別支援ということで人を派遣してもらえるのは非常にありがたい。ただ、枠が限られているので、制度を拡充し、余裕を持った学校経営をしたい。学校が荒れてしまうと、眠れない・休めないなど通常の学校とは比べられないくらい負担が大きい。多忙化という意味でも、中学校の生徒指導は大きな割合を占めていると思う。
- ・生徒指導についても人材育成がテーマとなる。研修などもやっているが、さらに学校と教育委員会で協力して、生徒指導担当教員を育成することが大切。それによって施設の修繕費も大きく変わってくる。

7 小中一貫・小中連携について

- ・小中一貫・小中連携ということは、進めていかなければいけないと思うが、1つの中学校に複数の小学校から進学してくる場合は、バランスが難しい面があり、慎重に取り組む必要がある。
- ・小中連携が盛んになってきており、9年間をつないだ部分での授業の研究などにも対応していかななくてはならない。

8 その他

- ・学校教育課と商工会議所で連携して行っている、キャリア教育については、中学生が職業や商業などを考えるうえで大変よい機会となっている、早く全校が同じ体制で実施できるよう取り組みを拡げてほしい。
- ・教員の授業力向上について、学力向上推進プロジェクト協議会の提言も出してもらっているが、非常に重要である。教員の授業力向上が、子どもの学習への意欲を高め、考える力や人の意見を聞いて、それを基に発言・表現・伝達する力などを伸ばすことにつながる。

- ・生徒が急増している学校では、施設が不足しているケースもあり、ハード面での支援もお願いしたい。
- ・予算面については大変厳しい状況で、出張旅費などでも苦勞しており、支援が必要である。
- ・無い袖は振れないということだとは思いますが、とにかく人の確保をお願いしたい。
- ・学校選択制で幅広い地域から子どもがくるようになったため、授業数確保の目的もあり、開かれた学校といいながらも家庭訪問をなくし、その分を3者面談にした。
- ・教員の人材育成も取り組んでいかなければいけない。
- ・研究授業での指導・講評を依頼した場合に、必ずきていただき、また指導案の指導などをお願いしても、常にやっていただくなど、指導主事をはじめ教育委員会の指導・協力体制がしっかりとしている。

(3) 三浦半島地区教職員組合

日 時 平成 22 年 2 月 5 日 (金) 15 時 30 分から 16 時 40 分

会 場 横須賀三浦教育会館

テーマ 本市の教育について

1 教員の多忙化について

- ・教員の多忙化の問題というのが一番の問題。ここ 5 年～10 年で大変忙しくなってきた。
る。
- ・原因としては、業務内容が説明責任という部分も含めて細かくなったこと、これは PC の導入により、求められるようになったという面もある。それから、新たに課題が出て、それに対応する施策が打ち出され、委員会や学校の中で対応する組織を立ち上げるといったこと、新しい学習指導要領への取り組み、そういった積み重ねのなかで多忙化となっており、子どもと関わるのが一番教員にとって大切なことだが、それよりも、そういう手続きなどが多くなってしまっている現状にある。
- ・学級の定数は、現在 40 人だが、35 人、30 人あるいはそれ以下になれば、かなり学級担任の業務は改善され、子どもに対する見取りももっと細かくできるようになると思う。
- ・20 人くらいから 40 人まで、様々なクラスがあるが、国でも、来年度の予算編成に向けて、少人数学級編成というのを具体的に取り上げていこうという話しが出ている。学級定数の見直しは、30 年ぶりという話しを聞いたが、45 人から 40 人になったときには、完結するまでに 10 年かかったということだった。新しい制度ができて、子ども達に対して余裕のもてる教育活動ができるようになったときに、財政的な理由や教室が不足することなどで進められないのはもったいない。社会全体でも教員の多忙化・負担を減らそうという話が進んでいるので、その動きを見越して、早く導入できるように検討課題として取り上げてほしい。
- ・教職員がいかにやる気をもって元気に出来るかが大切であるが、現場は忙しい。インフルエンザの影響などもあったし、週 5 日のうち 4 日は 6 時間授業で、授業は目一杯。それに加えて、打ち合わせや作業などでなかなか子どもと関わる時間がとれない。
- ・教職員も意欲をあげようということで、個人能力主義になり、成果をあげることが求められているが、チームワークが乱れている印象がある。学校現場は 1 人で頑張ってもだめで、教員・給食調理員・事務職みんな、学校全体でチームワークがないといけない。

学校の現場はどうかなのかというのを見ていただいて、教職員が元気になる体制を作ってほしい。

- ・授業が終わって、それから部活動、その後でようやく事務仕事になり、遅いところでは9時でもまだ残業している。そういった多忙化、余裕がない状況で、授業に回せるエネルギーが少なくなっている。学校の教育活動のなかでは、学力というか授業にもっと力を注げるような体制が必要である。
- ・若い先生が増えており、若くて体力があるので、なんとかなっている部分はあるが、度を越してしまうと、身体を壊してしまう。ノウハウがないなかで、保護者の対応などでも、苦勞している。若年層が増えていることについても目を向けて、どのようにフォローを行っていくか、という視点ももってほしい。
- ・経験のある教員が、若い教員へと実践のなかでノウハウを伝えていこうとしているが、新しい教員は研修や報告書の作成などであまり時間がとれない。
- ・年齢が高い教員などで、病気や家族の介護などの問題出るなどして、一人がうまくいかなくなると、ドミノ倒しになってしまう。一人が倒れると代わりの先生が負担になる。昼休みがなく、休みなく、夜遅くまで働く、教員が学校の現場だけしか知らず、他の人の考え方を知る機会がないということにならないように、多忙化を解消していかないといけない。

2 不登校対策・支援教育について

- ・不登校が多いため、関係者で会議をし、研修やチームで取り組んでいる。スクールカウンセラーは現在週1回だが、常駐してもらいたい。
- ・家庭の事情であったり、LD・ADHDなど何らかの障がいがあったり、人間関係がうまく作れなかったり、中学校の授業についていけないなどの理由で、不登校になるか学校で暴れるかといったことになる。それぞれの事情が違うので、親を呼ぶなどして、個別に対応しているが、一人一人丁寧に対応していかなければならない。学力の遅れについては、2学年以上遅れている生徒もおり、夏休みの補習などもやっているが、個別に対応するとなるともっと人員が必要である。
- ・外国籍の子が多く、家庭の経済力の差も大きい。そういったことは子どもたちの学力にも出てきているし、不登校や担当する教員の多忙化なども絡んできている。給食費や校納金も集まりが悪く、その徴収も行っており、教材研究の時間が十分にとれない。
- ・親が朝起きられなくて、子どもが起きられないケースや親が子どもを通訳がわりに連れ

ていってしまって、連絡がつかない場合などもある。家庭への支援の施策が望まれる。

- ・ 支援が必要な子どもが多いので学生ボランティアにもきてもらうが、人がなかなか集まらないので、教員の配置増や学級定数が減ることが望まれる。
- ・ 不登校の原因は様々で、保護者も多様化しているなかでは、学校だけではなくて、専門的な知識や対応が必要になっていると思うので、組織的に出来ればいいと思う。
- ・ 学校に昼に行っても、職員室には教頭しかいないか誰もいないかという状況。多忙化について教員が努力してできる部分もあるとは思いますが、施策としては人の配置ということになる。
- ・ 外から学校を援助することが必要。ふれあい相談員も学校に配置されるが、配置されると教員との打ち合わせが必要となる、もっと自分で判断して動けるように、学校の外に配置してほしい。

3 地域との連携について

- ・ 教育というとすぐに学校現場に囚われてしまうが、子どもが家庭で学習できる環境にないケースや、母子家庭で母親が子育てに悩んでいるというようなことも少なくない。
- ・ 横須賀市は、こういうのが準備されていますというような体制は進んでいる印象があるが、一定の家庭環境と学力がある子は、利用できているが、そうでない家庭も、まだ多く、そういう対象への施策がしっかりと出来ていかないと、犯罪の増加にもつながる。
- ・ 地域との連携というと、すぐ学校がメインになってしまう。学校は色々な施策が、次々と降りてくるが、これらは減っていかないと、どんどん増えていく。現場も本当の狙いが見えなくなってきて、やっていたらいいということになってしまっている状況もあると思う。
- ・ 隣保館などでは、青年指導員が配置されていて、待っているのではなく、積極的に地域に出て、色々と活動している。学校にこない子がいれば、呼んで学習させたりなどしている。これからは、地域に指導員を配置したり、拠点として公民館を利用するなどして、学校だけではなく、地域や行政がもっと教育に関わっていくことによって、学校現場の負担は軽減されるのではないかと思う。こういったことも基本計画にも入れてほしいと思う。
- ・ 学校支援地域本部について、既に取り組んでいる他都市の学校の校長や働いている方の話しなども聞いたが、勤務時間外に実施することについて、出来る人だけでいいからと言いながらも出席しないと地域から、あの先生はやる気がないといわれてしまうような

ことも現状ではあると聞いた。そういう状況は、学校には相当厳しいと思う。

- 学校が軸となるのではなく、地域指導員や公民館が地域本部のような役割を担って、そこに、学校も絡んでいくという方向が良いのではないか。
- リタイアした方が地域にいたので、そういった人材を生かしていくことも必要。
- 生徒指導担当は、担任や授業を受け持った教員がやるのは限界。専任で動けるような人を配置して、底上げしていくことが必要である。
- 地域に出かけているのはやはり教員。学校だけではなく、自治会や民生委員の立場の方がいろいろ動けるような、施策や予算を充実していくことが必要である。

4 学校と教育委員会の温度差

- 教育委員会の意図がわからない事案が多い。例えば、学校のHPを更新した回数の報告など。
- PCの1人1台により、PCが苦手な職員は苦勞している。また小学校で英語活動が始まるが、英語が苦手な教員もいると思う。業務が多忙で、なかなか習熟する機会がないなかで、習得していくのは難しく、長期間に渡る研修なども必要ではないか。
- PCが配布され、PCでの業務が増えるにつれ、セキュリティの問題で仕事の持ち出しができず、土日に学校で仕事をするケースが増えているのではないか。
- 行政も学校教育や子どものためを思っていることは分かるが温度差がある。施策でも子どもの伸びが見えるものは、教員から不満が出ないが、これは何のためにやるのかと疑問に思うものが増えてきていて、多忙感が積み重なっている。
- 小学校1～4年生の英語活動も横須賀だからというのは分かるが、それよりもっと大事なことがあるのではないか。
- 6年生の美術館見学も全校で行うようになったが、子どものニーズに合っているか疑問である。むしろ、以前に行っていた4年生のごみ処理場の見学の方が子どもには還元されていたように思う。

5 高校について

- 総合高校が開校されたときに、国際教育とコンピュータにすごく力を入れてきた割にはどんどん予算が削られて、学校現場が苦しんでいる。教育委員会としての考え方が見えてこない。
- 例えば、エラノラ高校との交流事業についても、外務省から依頼があった場合の受入に

比べて横須賀市から依頼があった場合の受入では、支払われる金額が少ないということなどもあり、ホストファミリーの家庭が見つかりにくく、厳しい状況である。

- ・エラノラ高校から来た学生と在校生は授業の中での交流を図っている。授業以外での交流の機会も設けたいが、予算がなくて企画できない。

6 荒れについて

- ・中学校で、学校の荒れとどう向かうかは大きい要因。うまくいっていれば問題ないが、荒れの原因として、子ども自身の問題、集団の問題、ネットワークの問題、学校をまたいだ問題など、集団化して困難性を帯びてくると、教師の労力のほとんどがその解決に追われる。各学校様々な手法でやっており、どれが正解というのは分らないが、教員が協力して対応する体制が必要である。
- ・今は人が入れ替わっていく時代で、経験を持った方が退職し、新しい方がどんどん入ってきている。そういった新たな局面のなかで、生活指導面や文化といったものをどう作っていくのか問われていく。学校のなかで教育力・指導力をもっていないと、色々なところで荒れが起これると思う。そういったことを考えると、子どもと向き合う時間の確保を、国・県がどう保障していくかということも含めて、考えていかななくてはならない。
- ・学校で生徒が荒れて怒ったりすることがあるが、その家庭は親も悩んでいることが多い。それを底上げしていくことで、状況はずいぶん変わってくると思うので、親が簡単に相談できる体制をつくるのが大切である。

7 給食費について

- ・これは教員の仕事かと思うものがある、それは給食会計事務。給食費を銀行の口座から引き落とししたかどうかの確認を銀行が来て行う。引き落とされない家庭には、親にプリントを届けるわけにいかず、子どもに持たせるため、子どもは大変辛い思いをする。それが2・3カ月たまってくると、担任は連絡帳や電話で給食費の催促をせざるをえない。本当は親と子どもの話しをしたいのに、給食費の話となってしまう。給食会計事務はぜひ行政でやってほしい。これがなくなれば、他に時間をまわせる。また、引き落とされなかった場合には、子どもが現金で持ってくることになるが、これは考えてほしい。
- ・子ども手当と給食費の口座と一緒にして、精算できるようなことができればだいぶ変わるのではないか。
- ・中学生の給食は牛乳だけだが、いろいろな家庭があって、口座を作らない・作れない・

一度もお金を入れない家庭もある。就学援助について、こういう制度がありますよと紹介しても書類が出てこない、何を出せばいいかわからないというような場合もある。それが就学援助を受けているのか、4月・5月でなったのか、途中でなったのか、分かりにくい。生活保護を受けている家庭は、一部を除いて就学援助ではないため、逆に学校で現金を預かって、給食費などを引いてから返すというようなことができない。そのお金が学校にこなくて未納になるようなことがある。

8 計画づくりについて

- ・今回のように現場の声を聞いてもらう機会は大切。1回だけでなく、今後行ってほしい。
- ・教育ということであれば、やはり子どもの声を聞くことが大切。教育振興基本計画の策定にあたって、子どもの考えていること、思いなどを学校に来て、聞いてほしい。
- ・計画が作られると、目的や手段、その手段として事業が多数ある。事業が立ち上がった段階で、そのこと自体が目的になっていき、本来何のためにあったかということと離れていくことはよくある。大きな目的のなかから個別に下ろしていくとそうになってしまう。現場から積み上げていった施策は、現場に戻っていく。次の10年に向けて作るということならば、現場が何を必要としているのか、教員が必要、子どもと向き合える時間が必要、環境整備をどうするかそういうところから始まる、そうすれば本当に意味のあるプロジェクト、子どもにきっちりと還っていくプロジェクトになる。ただ、人員配置といっても、市でどうできるかという問題はある。ただ、国の施策が今変わろうとしているので、それに乗りながら、横須賀市として、特色をつけていけば中身は充実すると思う。

9 その他

- ・小中連携と簡単にいうが、小学校と中学校の先生が集まって会合するためのエネルギーだけでも相当大変である。中学校では部活動などもあるし、到底勤務時間内には出来ない、そういう矛盾がいっぱいある。
- ・学力の低下を防ぐためには、授業が一番大切。少人数授業と一斉授業では、目の行き届き方、子どもの反応も違う。学級定数を減らすことや少人数授業、ティームティーチングをもっと進めてほしい。
- ・校舎の老朽化がひどくて、雨漏りなどしている箇所もあるので、対応を進めていってほしい。

- 司書教諭は各校にいるが、専任ではなく、学級担任をもちながら行っている。図書館の活動、情報センターなどといった取り組みは、専任でないとなかなか難しい。また、図書の新刊を配架する作業も大変で、PCの導入なども必要ではないかと思う。
- 小学校の英語活動が1～4年生に入ったが、低学年は、日本語もままならない状態で、早いかなという印象はある。またALTと打ち合わせする時間が合わず、苦慮している。
- 学校現場で健康診断を4月から6月までやるが、異常があったら治療勧告をするが、家庭によっては異常があっても料金がなくて病院にかかれぬ子もいるので、健康診断をやる以上はそこまでケアする必要があるのではないか。
- 教師の病気のなかで精神疾患が多いと報じられている。そういう教員が、学校に行きたくなるような体制を作ってもらいたい。それにはやはり人。国・県の動きだけではなく、市単独でも教員の数を増やすと謳ってほしい。
- 就学援助の条件が良い、あるいは、小学校が保育園に隣接していることなどで転校してきたというような話も聞くことがある。

(4) 障害者施策検討連絡会

日 時 平成 22 年 2 月 9 日 (火) 午前 10 時から午前 10 時 40 分

会 場 横須賀市役所 405 会議室

テーマ 本市の特別支援教育について

1 個別指導計画などについて

- ・ 個別の指導計画や移行計画について、もっと充実してほしい。
- ・ 学校は通過していくところではあるが、その時々で重要である。近い将来または、大人になって働いているその人を想像しながら、少し長い目で見て、学校のことも話しあっていけたらいい。
- ・ 個別教育は、子どもの置かれているレベルに応じて、個別の支援目標があるだろうと思う。その子どもが、今必要とするのが何かということについて、しっかりと意思疎通して、計画を立てていかないといけない。親も納得したうえで、本当の目標は何だろうかということを決めてほしいが、その部分が足りていない・自分の思いを汲み取ってもらえないと感じている保護者が多い。
- ・ 教員も計画を立てるだけで大変な努力が必要であり、悩んでいるとも思う。保護者と教員とグループディスカッションなどをするなど、保護者が納得できるシステムづくりが必要だと思う。
- ・ 社会で生きていくのに役立つようなことに継続して取り組み、学校を卒業しても今までこうやっていたので、続けてくださいというような計画を立ててほしい。
- ・ 個別の指導計画も含めて、学校間格差が非常に大きいのが気になる。学校間格差の原因は、校長先生の考え方、特別支援学級を担当する教員の能力、学校内の他の教員の協力体制などである。

2 教員について

- ・ 教員の力が足りないという部分も感じる。
- ・ ヘルパーが行く場合もあるが、ヘルパーというのがどういう制度できているのかを知らなかったりすることもある。また、自立支援法の制度なども知っていただければいいと思うことがある。

- ・教員は、学校の中のことについては見えているが、学校から帰った後のことや将来も見据えて、こういうことがあるから、学校でこういうことをやっておこうという視点が足りていない印象がある。
- ・特別支援学級の教員がガードを固め、一般の先生が参加しようとしても、テリトリーだから下手のことはしないでくれというケースもあると聞いている。

3 学校全体での支援体制について

- ・特別支援学級で教員が出張や休みの場合に、ある学校では管理職を含めてしっかりとフォローに入るが、介助員任せになっている学校もある。
- ・校外学習に行く時に、保護者の付き添いを求められることがまだある。
- ・特別支援教育に直接携わっていない教員も障がいのある子どもの教育についての研修をしてほしい。
- ・授業時間、カリキュラム、教科に関しても、弾力性があるのは大変よいが、弾力性が子どもにとっての弾力性ではなくて、先生側の弾力性になってしまって、先生が講習会的时候は、早帰りや休みになってしまう。本来だったら他の先生が入って授業をやるということがあると思う。教科に関しても弾力性があるのはよいが、障がいのある子どもに専門教科を教えようと思ったら、普通の子ども以上に、やさしく噛み砕いて教えないとわからない。中学校は、それぞれが専門で教えるなかで、美術や音楽の教員などが全教科を教えようとしている。もう少し学校全体が支援する方向になっていれば、上手に振り分けることができるのでは思う。時間数についても、早帰りや休み、親の付き添いがあるというのではなくて、全体で取り組んでいけば、時間数や教科数の足りないと思われる部分はもう少し何とかなるのではないかな。

4 普通級と特別支援学級の交流について

- ・特別支援学級から普通級に交流に行く場合に、人手がないことを理由に断られる場合や「〇〇が出来たら交流しましょう」ということで先延ばしになる場合、給食を一緒に食べるだけで済まされてしまう交流がある。
- ・個別指導計画のなかで交流の意味を三者で確認して、そのうえで、内容や時間を設定していただきたい。
- ・交流の時間があるということは、特別支援学級から行った方だけでなく、受け入れる側にとって意味がある。せっかく交流するのだから、障がいについてももう少し考えよう

いうチャンスであり、利用できるはず。時間的にも色々忙しいため、総合的な学習などの時間での体験活動、車いす体験や目が見えない体験を1回くらいは経験しているかなという現状で、そこからもう一歩先に進んでいる場合はほとんどない。

- ・知的障がい者との交流の場合でも受け入れる側での交流の意味みたいなものについて、小学校のときは自然に交流があるが、中学校になると忙しいので、担任も生徒のどこかの支援学級の生徒がご飯を食べに来ているくらいの感覚しかない印象があり、もう少し交流の下地があるとよい。
- ・せっかく、全校に特別支援学級があるという意味が何なのかを考えてほしい。学校での経験が社会を作る時の元になるわけなので、交流の機会を有効に活用していただきたい。

5 他機関や他の学校との連携について

- ・横須賀市には、筑波大学附属特別支援学校があり、いわゆる自閉症に特化しているが、小学生までのため、中学生以降との連携がうまくいっているとは思えない。筑波大学附属特別支援学校の在学中には、本当に自閉症や発達障害に特化した支援を受け、そこで混乱なく過ごしているが、中学校になったときに、しっかりと引き継いでいるのかというと、特別支援学級でも、特別支援学校でも、本当に出来ているのかと思う。せっかくある他の学校・機関とどう連携をして、大人になるまで混乱なく、支援の継続性を保っていくかということを考えていただきたい。
- ・特別支援学級に入っていない普通級の子どもでも気になる子どもがいる。先生も困るだろうし、保護者もいろいろ言われて困って、児童相談所に相談にいったようなケースで、精神科の医者が一緒に学校に行ってアドバイスするようなこともあった。そういう意味ではいろいろな関係機関との連携について、教育委員会でも取り組みのマニュアルを作り、学校や教員に伝えられれば、いろいろな関係機関と連絡をとり、アドバイスを受けられていいのではないか。
- ・小学校 48 校、中学校 24 校、それぞれに頑張っているが、その頑張りを、学校の中、学校間、外の機関と上手く横につなげていかななくてはいけない。
- ・横須賀には、筑波大学附属特別支援学校、県立武山養護学校、市の所管の学校があるということで、行政間の連携を進めてほしい。
- ・特別支援のセンター機能というのは、県立武山養護学校と市立養護学校にあるが、それがうまく地域の特別支援学級に反映できるような連携をさらに進めることが必要である。
- ・他機関は、学校側が良いといえば、学校に行けますというケースが多いので、色々な人

に入ってもらえるようになるとうい。

6 人員配置などについて

- ・特別支援学級の設置や特別支援教育コーディネーターの配置が、全校に近づいているのは良いところといえる。
- ・特別支援教育コーディネーターがいるが、専任でないこと、特別支援級の担任と交流級の担任とのコーディネート内容などで学校間格差があること、担任が新任の教員や臨時的任用の教員のことが多く、フォロー体制が足りないことは、課題である。
- ・せっかくコーディネーター制度があるので、専任が無理でも、もっと動ける体制にしてほしい。他機関との連携、普通級・特別支援学級とのコーディネート、親とのコーディネートは、本当に一人分の仕事である。また、他の学級の担任や特別支援学級の教員では立場としてコーディネーターとはならない。
- ・スイスでは、コーディネーターがいつも教室に一人いて、親は直接教員に言いにくいにくいことは、コーディネーターに、特別支援学級の教員・普通級の教員も直接親に言いにくいことは、コーディネーターに言う。コーディネーターはそれをやるだけの権威もある。学校の中でのコーディネーターの位置付けを学校全体で認めてくれないと、コーディネート機能が発揮できないと思うので、せっかくある制度であるし、コーディネーターが動けるように学校全体で支援する体制をお願いしたい。
- ・アメリカのADA（アメリカ障害者法）では、就労についてはあまり武器にならなかったが、教育はすごく行き届いている。マンパワーが一番違う。20人学級くらいで、座れない子にはその子ども用に席があり、そこに1人配置されているし、手話の子・点字の子ということがあれば、教員が3人くらい配置されている。特別支援学級は、その子が昼休みにちゃんと眠れるように、休養できるようになっている。普通の授業を普通に受ける権利がある、子どもの権利があるという視点がある。それを実現するためには、マンパワーが必要である。やはり、40人・35人のなかに1人入れて、マンパワーが不足しているところに入れてというのでは嫌になってしまうし。日本はマンパワーが足りないし、クラスの人数も多すぎて、先生対子どもの数が全然違う。そういう理念がないといけない。
- ・介助員ではなく教員を増やしてほしい。
- ・センター機能を充実するということで、発揮できるための人材の配置が求められる。
- ・精神障がい単独の子どものための、特別支援学級や特別支援学校がなくて、困っている

人がいる。

7 普通級にいる子どもについて

- 普通級にいる何らかの障がいを持っているであろう子どもへの対応というのが、非常に遅れている。今いろいろな意味で障がいの幅が広がってきていると思う。学校の中で、明らかに発達障害かなと思われる子どもがいて、そういう子どもたちへの対応の部分に目が行き届いているとは思えない。普通級に入っているなかで、そのままになってしまっているが、その時期ごとに適切な支援があれば、大人になったときに困らないで生活できる可能性がある。そこを考えて、これから計画のなかで、学校や教育がどう支えていくのかは、考えなければいけない問題である。
- 他市に住んでいたこともあったが、その市でも、普通級の子どもと離して教育してほしいという親が多かった。親の教育も含めて子どもの権利というのをきちんと考えて、作っていけば大きな間違いはないと思う。
- 支援が必要な子どもへの対応としてヘルパーが入った際に、その子ではない子で、クラスに明らかに浮いている子どもがいて、ヘルパーにくっついていって色々なことを求めてくるのがあって、これはどうなのだろうと思いつながりながら対応していることがあると聞いている。
- 「かながわA（神奈川県発達障害支援センター）」の出前を活用して教員のレベルアップを図ってはどうか。（追記）

8 その他

- 授業時間の教科の中身についてもバラつきがある。
- いろいろな仕組みやいろいろなものをどこまでいけば 100 になるかという話は、いつも議論になる話である。そこを目指す精神を大事にしながら、そのなかで機能ではなく、目的に合致してないものが何なのかを分析・評価して、どうしていくのかという形で計画は練るべきだと思う。
- 特別支援学級は、神奈川県の場合、1人でも要請があれば、学級を作りますということになっているが、そのあり方が言われているように、孤立しないようにしなくてはいけない。孤立しないように支援することを通して、学校の公教育のなかで、PTAや地域の関係者にどうやって理解を求めるかということを持ちこんでいただくと、地域が支える、地域で生活するという土壌ができてくる。地域に学校でどう教育していくか、ど

ういった形でやっていけば、地域で生活できるのだということを地域に入り込んで話をしていかななくてはならない。学校教育とは違うが、生徒・児童を指導するという事は、地域の関係者に対してもそういったことを理解してもらうことが必要なので、そういったことをお願いできればと思う。

- 横須賀は虐待や不登校が多いといわれるなかで、直接学校教育ではないが、子どもがすぐキレることなどについて、給食や食生活に関して、PTAなども交え、包括的な話がないといけないと思う。
- 医療的ケアに関する考え方を先生がしっかりと理解していかないとまずはいけないと思う。
- カリキュラムのなかで、権利と義務や自由と責任に関して、日本の学校教育ではあまり取り組んでいない印象がある、そういうものあればいいのではと思う。
- 障がいに関係する部署が、児童相談所、健康福祉部、こども育成部、教育委員会とあり、それぞれの角度から見ている。それを施策の中でまとめる部署がはっきりして、外から見分るようになればありがたい。
- 介助員配置申請は校長の判断とのことであるが、明らかに足りないと感じた場合、保護者から教育委員会に伝えるルートも必要ではないか。(追記)

*本文中「(追記)」とありますのは、会議録校正時に追加意見として提出されたものを掲載したものです。

(5) 横須賀市PTA協議会

日 時 平成 22 年 3 月 15 日 (月) 午後 6 時から午後 7 時

会 場 横須賀三浦教育会館

テーマ 本市の教育について

1 教員の多忙化について

- ・学校が忙しすぎるというところを改善しなくてはいけないと感じている。特に、事務の色々な仕事、小学校の場合、給食費の受領なども教員が行っているなど、色々な事務を教員がやらざるをえない状況になっている。本来、学校の先生はもっとゆとりを持って、教育に臨み、子どもたちに向けて、全力を注いでほしいと思っているが、それ以外のところに仕事を割かれてしまい、毎日があわただしいのを見てきているので、そこは改善してほしい。学校には、事務の職員がいるので、もう少しそちらに事務をシフトして、行えるような教育環境にしたらいのではないかと。
- ・教員が非常に忙しく、今までよりも職員室に先生がいない状況が多くなった。もう少し先生の数を増やした方がいいのではないかと感じている。
- ・小学校では、新 1 年生が 35 人未満で、1 クラスになってしまう。1 年生だと 35 人を越えれば 2 クラスとなり、教員も 2 人になって、2 年生の時に 1 クラスに戻るということだが、35 人以下だと教員が 1 名少なくなってしまう。出来る子もいれば、手がかかる子もいて、目一杯で行っているのに、人数が減ってしまうと、教員は非常に大変だと思う。もう少し教員の人数を充てられる、1 クラスあたりの児童数というのを変えられないかなというのをすごく感じる。担任 1 人だけでは大変なこともあるので、非常勤でもいいから配置するようになれば、教員ももう少し子どもたちに関わる時間を増やしてもらえるのではないかと。
- ・40 人で 1 学級というのを撤廃するというのを横須賀市として検討できないか。国で決めていることだということだが、独自の教育ということで、20 人くらいにできないか。

2 不登校やいじめなどについて

- ・学校に来れなくなる原因というのは様々だと思うが、純粋な子ほど行けなくなっているのではと感じている。不登校でも、学校がつまらなくて自ら行かなくなるタイプと色々考えてしまって、行けなくなってしまうタイプがあるが、行けなくなるタイプの子の救

済、接し方など支援が必要であるということを感じる。また、子どもが学校に行けなくなる状況になると、親が負い目を感じてしまうところもあるので、そういった親へのフォローもこれからの課題かと思う。

- ・ 小学校を卒業して、中学校へ入学するときに、小学校の人間関係を引きずったまま中学校へ来て、中学校のなかで、また人間関係に悩む子どももいたりする。小学校での問題、どんなことがあったのか、こういう背景があって、こういう人間関係になっているのだということを小学校から中学校へ詳しく申し送り出来る体制、情報交換できるような体制を作ると、中学校で孤立したり、いじめにあったりというところに、光が当たるのではないかと思う。
- ・ 1 小学校 1 中学校、さらに幼稚園も主に 1 つのような場合だと、逃げ道がないので、幼稚園で出来た人間関係が中学校まで引きずられる場合があるので、かわいそうな場合がある。
- ・ 学校の中に、不登校だった子どもが学校に来ることができるようになったときに、もう少ししやすい場所を作ってほしいと思う。

3 学校の適正規模・適正配置などについて

- ・ 今後も横須賀市の人口は減少する傾向にあり、私たちの頃に比べて、子ども達の数は半分くらいであるが、学校の数が半分になるわけではない。また地域性の問題などもある。学校の適正規模・適正配置の会議などでは、教育委員会の姿勢が統合ありきと感じられて、地域の間は非常に怒っている。今後もそのような状況というのは色々な地区で発生しうる。元々は同じ学校で、別れたようなところが、元に戻るのは可能であっても、元々別のところであったものを、人が少ないからという理由で、統合を計画されると、地域との問題が発生して、地域対教育委員会という雰囲気の問題になってしまう。その辺は計画をされる際に、計画をしてもらいたくはないですが、留意が必要であると思う。
- ・ 中学校で、子どもの数が少なくて部活動が成り立たないケースがある。先輩が 2 人しかいなくて、試合に出るときに、他の部の子どもを連れてきて試合に出たりもしている。中学校の部活動はその後の将来や人間形成にも影響する。勉強も大切だがスポーツも大切なので、もう少し人数が増えるといいと思う。

4 学校の設備や衛生面などについて

- ・ 校内の衛生面で、トイレ（便器）の清掃は児童生徒がやってはいけないことになってい

るが、業者に対して、どこまで清掃を行って、どこまできれいにすればいいかということの具体的な指示がないので、その辺りを明確にさせていただくと、PTAとしてもフォローしやすい。昨年までは年に1回学校のPTAで集まってフォローしていたが、どうしても人数が集まらなくて、廃止してしまった。先生は見きれないし、生徒は汚す一方だということで、外からはきれいな学校に見られるが、そうでもないということころもあり残念である。このレベルまできれいにすることを明確に指示し、最後に誰かがチェックするなど、業者も当然お金を支払われて、実施しているのだから、そのくらい行ってもいいのではと思う。

- ・学校に行くと、学校が汚い。空き教室が多くて、そこまで掃除が行き届いていない。
- ・学校の校庭芝生化計画は、実現したらいいなと思うが、その反面、かなり負担が増える懸念があり、一週間に一回は草むしりをしなくてはいけないようなことも聞いている、そこに割く人間をどうするか、人件費などの問題もあるので、モデル事業でやるということであれば、そういうところも見ていかななくてはいけないと思う。

5 家庭教育・PTA活動について

- ・家庭教育の部分で、育児放棄のような保護者を目にするところがある。教員も声をかけているみたいだが、周りの人たちもどのように対応しているのかをすごく悩む。以前に虐待などがあつたときには児童相談所へ通報してくださいというような紙もきたが、なかなか通報しづらい面もある。ご飯の支度をしていない家庭も多いかなと感じるし、気になっている。気にはなるが、そういう母親というのは学校に出てこないの、なかなか接する機会がなく、子どものことはよくわかるのだけれど、親がわからないということが悩みとしてある。
- ・PTAの活動では、学年PTA活動など子どもに関わる行事を行うと参加率が高いが、講習会や講演会、またボランティアなどになると一気に参加率が下がってしまっており、社会教育団体という面では難しいと感じている。

6 教員などについて

- ・教員も団塊の世代の退職に伴い、入れ替わりが多く、新任といっても学校を卒業してではなく、非常勤などで勤められた方が学校に赴任してくることもあるが、本当に若い人が大分入ってくるようになった。そのようななかで、教員が、子ども達に泣かされたり、逃げて自習になってしまい、授業放棄みたいになってしまうこともあるというような話

も聞いた。一時期、教員の教育ということも考えられている感じだったが、そういう部分も課題はあると感じる。

- 中学校には、いい生徒がたくさんいる、90%の子はまじめないい生徒だと感じるが、学校の先生が扱うのは残りの10%になってしまう。できれば、きちんとした生徒にきちんとした教育をしないといけないと思う。今の生徒は、塾のオンパレード。塾に行っていない人間は、高校の進学さえアドバンテージがない。そうではなくて、普通の中学校にいて、勉強をしていて、優秀な子は、優秀な学校に進学できる、それが普通だと思う。学校の教員もある程度担当を区分けして、指導するのも一つの方法ではないか。
- 統合や学区の撤廃、私立の状況などによる高校の偏差値や難易度の変化などの情報について、中学校の教員は分からないことが多い。塾ではどのように調べているのかは分からないが、そういう情報を多く持っている。以前、子どもの担任の教員は、塾の話しをダイレクトに自分に言ってくれと、それで情報収集をしている教員もあった。忙しくて情報が入らないのか、塾だけにしか入らないのかは分からないがそういう点があると思う。

7 計画の策定について

- 教育振興基本計画、期間が11年間ということだが、人口が減ってしまうなかで、今の教育の質を維持できるか、そしてグレードアップすべきところをどうするかという2つあると思う。人口が減って小規模校が出来た場合に、それを良しとするか。教育面からして、それが子ども達にとって本当に良いのかどうかという所は、教育振興基本計画の旗振りの部分かと思う。それに加えて、課題をどのように底上げしていくかということもどのように入れていくかだと思うが、1学級あたりの人数が40人を切るようにということはどうするのか、ということによって、もう少し顔が見える教育にしていくなど、今のグレードをもう少しあげるにはどうするかということなどを出すといいかと思う。何人学級がいいのかというのは難しいと思うが、学校の教員からもよく聞いて、実際40人では厳しくて、1人が荒れだすとそこに引きずられて学校が成り立たないようなことも見ている。人口が減っていった場合に今と同じサービスでいいのかという思いもあるし、そこら辺を特色、強み・弱みではないが、入れてグレードアップすると思う。
- 現場の教員の意見を教頭、校長、教育委員会がもっと吸い上げてもらえれば、子どもも楽しくなるだろうし、もっと良くなると思うので、考えてほしい。

8 その他

- ・台風の時、休校するかどうかについて、横須賀市ではその都度学校長の判断という感じだと思うが、働いている人などは曖昧な体制だと対応が難しいのではないかと感じたので、基準を統一した方が良いのではないかと思う。
- ・他の市で、区に1つくらいの単位で、ログハウスの施設があって、学校が終わった後、子どもが遊びに行けるような施設がある所がある。青少年の家よりも、開放的で、大きくて、低学年から高学年まで集まって遊べるような施設なので、そういった施設が横須賀にあるといいと思う。

(6) 生涯学習センター・コミュニティセンター利用者

日付	時間	会場	出席者数
平成 22 年 2 月 25 日 (木)	15 : 30~16 : 10	追浜行政センター 会議室	40 名
平成 22 年 2 月 19 日 (金)	10 : 00~10 : 30	浦賀コミュニティセンター 第 3 学習室	7 名
平成 22 年 3 月 18 日 (木)	15:00~16 : 30	西コミュニティセンター 第 1・2 会議室	14 名
平成 22 年 3 月 20 日 (土)	13 : 00~15 : 00	生涯学習センター 第 1 学習室	9 名
平成 22 年 3 月 25 日 (木)	13:30~15 : 30	久里浜コミュニティセンター 会議室	参加者 なし

1 サークルの活動内容などについて

- ・30代から91歳まで参加する健康マージャンサークルだがサークルは1つのコミュニティだ。男女とも様々な年代がいて色々な問題が起きる。サークルを活性化するには皆の努力が必要だ。問題は荷物が多いので、保管場所の確保だ。マージャンだが、マージャン教室ではなくサークルだと話している。サークル活動として親睦部会、規則の検討部会、所作の品格向上部会などの部会を作り、全員が部会に所属し、活性化してほしいと考えている。自助努力をしている。
- ・パステル画を描いている。他の地域にどのようなサークルがあり、どのような活動をしているのか、グループごとに知った上で、コミュニケーションを図っていくとより良い活動ができるのではないかと。
- ・新しく加入しても、協調性がなければ仲間にとけこむことは難しい。
- ・煎茶の稽古をしているが、会員が減り4人で活動している。会員募集のポスター掲示などを行っているが、なかなか新しい会員が来ない。少人数だと消耗品や講師への謝礼など経済的に負担が大きい。一人当たりの費用が大きいのでまなびかんニュースへの掲載を思い留まっている。
- ・老人福祉センターで8回講座を実施した。しかし、趣味の世界はメンバーが固定し、友達同士、少人数の活動になる。数年で高齢化も進む。
- ・水彩画のサークルで活動している。発表の場があるのはとても良い。発表は生きがいになっている。発表は文化祭や街の画廊を借りて行っている。

- ・書道サークルで活動している。他市へ越したが、良い先生、活動の楽しさから市外から通っている。最近駐車できる場所が少なく、困っている人が多い。
- ・夜間、カラオケの活動をしている。文化祭直前は集会室が取れない。フラダンスの活動もして、老人ホームへ時々慰問に行っている。
- ・22年活動している。ピアノと指揮の2人の先生にお願いしている。会員が減り、会費の負担が大きい。市で補助してもらいたい。
- ・書道と朗読をやっている。学校に通う頃に戦争があったので勉強ができなかった。今勉強ができることに感謝している。
- ・場所代が不要な公民館なのに高額な謝礼をとる活動があると聞いたことがある。公民館ということで、安価にお願いできる場合もあると思う。
- ・地区の人だけでは会員は減少する。近隣地区の人を入れるのはよいことだ。センターからも賑やかにするためサークルを増やせといわれるが、以前の会場予約は話し合いで行っていたが、コンピューターのためそれができず苦勞している。
- ・友の会でペインテックスと社交ダンスの指導をしている。高齢化が問題になっているが病気を克服しまた参加してくる人もいる。

2 構成員の高齢化などについて

- ・講座後にできたサークルの講師が高齢になり、ほとんど指導ができない。会費に見合わない。授業料を取るだけで講師を続けることに困っている。講師に対してやめてほしいと言えない難しさを感じる。
- ・サークル活動は人生にとって良いことだと思ってきたが、高齢化で苦痛になってきた。
- ・木工を行っている。抽選で会長を行うことになったが、時間がとれず苦痛だ。甲冑隊にも所属し、学校でボランティア講師として活動しているが、年配者が多く、活動は風前の灯といえる。

3 友の会連絡協議会について

- ・友の会加盟団体が40から25に減った。高齢化が進んでいるため、文化祭を4日間から3日間に減らしたが、さみしい。先細りで、講座の集まりも悪いようだ。これから何を学んでいけばよいのか。
- ・友の会連絡協議会役員のみならず、サークル会員の減少が問題になっている。他の地域の状況を知りたいと考えている。

- ・行政からは友の会に加入していても、加入していなくても平等に扱うといわれる。加入サークルは会費を取られ、役員を任せられ、何もメリットがない。何かで差別化を図ってほしい。友の会役員はボランティアだ。会員の高齢化と高齢ゆえの病気により、役員のなり手がなくなってきている。
- ・友の会役員をしている。友の会参加サークルは、40 団体から 23 団体まで減り、文化祭の展示サークルが減った。役員は大変だと言われるので、順番に担当している。役員のなり手がいない。若い人に入ってもらえるとよいが。
- ・今まで文化祭の時、行政と一緒にやっていたが、今は事務室職員と分担ができて、友の会が自立してきているように思う。
- ・施設予約システム導入に際し、サークル協議会の団体の優先予約のお願いをしたが、公平性の観点からできなかった。140 程の使用団体中、友の会加入団体は 43 団体と加入しない団体が多い。加入団体は、様々な作業や文化祭出展など負担がある。館長、副館長も協議会のためにメリットを作ってくれているが会場が取れない。サークル協議会として何かしようとしても非常にやりにくい。このような活動も大事であり、サークル協議会がまちづくり活動に入れられている。皆のメリットになることは、少しでも優先的に利用させてもらえることだ。

4 公共施設予約システムについて

- ・公共施設予約システムで会場の予約がしにくくなった。
- ・施設予約システムの導入で会場が取りにくくなった。場所の確保と金銭的援助をしてもらえるとありがたい。
- ・毎月 2 回、コーラスの活動を楽しんでいる。活動は午前中の 2 時間だが、コミュニティセンターの午前の利用区分は 9 時から 12 時の 3 時間となっているため、1 時間無駄な時間ができる。公共施設予約システムが導入されてから、いつ予約が取れるかわからなくなり、活動しにくくなった。
- ・油絵サークルだが美術室が予約できないと学習室を使う。学習室の場合は美術室からイーゼルなど道具を運ばなければならない。今は会場を取るのが 1 番大変。以前は希望が重なった場合には、話し合いができたが、今はできない。
- ・パソコンで施設が予約しにくくなっているにもかかわらず、コミセンで金を取り、学習塾をしている人がいると聞いている。行政はしっかり把握してほしい。
- ・陶芸を 15 年続けている。会員が少なく、七宝焼と半々で美術工芸室を使っている。活動

ごとにふさわしい部屋があるが、予約システムが入ってから、誰が部屋を使っているのかわからなくなった。交渉の余地がない。友の会に入るサークルが減っている。優先的に部屋を使えるとか、何か魅力があればよいと思う。

5 施設利用について

- ・学校の音楽室を利用したい。
- ・久里浜コミセンは1年6月の工事に入るが、コミセンからは各自で他の利用施設を探してほしいといわれた。学校施設は利用できないか。他のコミセンは、利用状況はいいであり、音を出すものは利用できない場合が多い。
- ・逸見コミセンでも6月から耐震工事が始まるが、会場は自分達で探している。
- ・総合高校のSEAホールは一般市民が利用できないのだが、どうにかならないのだろうか。使用料をとってもよいと思っている。普段の練習会場としては無理だが、発表会場として利用したい。高い金額は無理だが、会場の利用料は多少支払ってもよいと考えている。
- ・33年サークル活動を続けているが、最近は会場を借りるのが大変。人数が多く、広い部屋を借りなければならない。野外での活動も組み入れている。
- ・コーラスで20年活動している。部屋が取りづらく、他市の有料施設を使うこともある。集会室を使うが、ダンスサークルが3人で広い集会室を使うのはおかしい。コーラスはピアノがある部屋でないと活動できない。
- ・文化祭直前はコミセンがリハーサル用に部屋を押さえてくれるが、通常の活動日も友の会加入団体用に曜日を固定して優先的に部屋を利用させてほしい。
- ・踊りと詩吟をやっている。土曜日は比較的会場を取りやすいが、平日は取りにくい。
- ・太極拳をやっている。集会室が取れず、体育会館を使っている。友の会に入ったおかげで、文化祭で発表し、徐々に会員が増えた。施設が有料だから活動がうまくいかないということはないと思う。西地区はやはり駐車場の名さに不便を感じる。

6 講座などについて

- ・市民大学を何回も受講したが、年配の方が多い中、4,000円は高い。講座が偏っていて、古典文学が多い。他の外国語も実施してほしい。鎌倉生涯学習センターの講座は幅が広い。
- ・講師には立派な方も多いが、指導態度が悪い方もいる。講師に問題がある。全体的に資料は十分だが話が下手だ。しゃべりすぎて質問の時間が取れない。ポケットに手を入れ

てしゃべったりする。話の脱線がひどいなど、学生に対して教えるのとは違う。講師は良く選んでほしい。

- ・人権講座に参加するが、亡くなった方の悲しい話をする講師には違和感があった。活躍している人の明るい話をしてほしい。
- ・コミセンの講座で、難しい内容の企画には集まらない。おもしろく、簡単なものでなければ入っていけない。よい内容の講座は友の会として残る。
- ・市民大学が夜間に何回かできないか。日中は仕事がある人が参加できない。夜間に講座を行うと多く集まるのではないか。18～20時か19～21時なら一般の学生や勤労者にも無理がないのではないか。
- ・高齢者学級は毎年実施しているが、参加者はほとんどが同じ人で、新しい人は入りづらい。OB会を作り、サークルを作って勉強を続けてはどうか。
- ・市民大学の立地と運営方針は非常に立派だと思う。冷暖房や音響もよい。受講カードシステムはスムーズに応募できる。映像でわかりやすく映すため教育効果は高い。運営の係員も対応は良好だ。しかし、講師はもったいない。
- ・趣味や娯楽も生涯学習だ。コミセン講座では趣味的なもの、市民大学では高い教養と分けられている。
- ・市主催講座は男性向けの講座が増えたが対象は65歳以上が多い。最近是不況の影響で60歳でも参加できる人がいる。対象年齢を下げてほしいのではないか。
- ・まなびかんニュースを見ると市民大学などウェルシティで行う講座が多い。コミセンの講座が減った。西地区の講座を増やしてほしい。
- ・市民大学も市内のコミセンを巡回して実施してほしい。
- ・西地区からはウェルシティは遠いので受講しにくい。

7 世代間交流などについて

- ・童謡を歌う会に所属している。子どもから高齢者まで対象だが、50歳以上が多い。若い世代に受け継ぐことが課題と考えている。学校の生徒が少なくなった。
- ・今年30周年になり、匠の域に入る者がいる。異世代交流といっても勉強が忙しく子どもは来ない。長井のソレイユで子どもとその親にペーパークラフトを行っているが、簡単なことから始めないといけない。1年生と5年生が一緒に行ってはだめだ。高校生でカッターを持ったことがない子どももいたが持たせようとする親が危ないという。日本はどうなるのか。ものづくりに関しては、60から80代の経験者、ここにいる技能を有し

た同好会の人たちを指導者としていくべきだ。ものづくりは技能の伝承だ。時間をかけてじっくりやるものだ。そういうことを我々の世代がやらなければいけない。次世代がない。若い人が育たない。教える人が奮起しなければだめだ。簡単な教室をレベルごとに持つことが必要だ。

- ・町内会長を辞めてから書道をはじめた。個人宅で行ってきたが、公民館を紹介してもらい活動を始めた。小中学生の子どもと高齢者に分かれて活動しているが、年に2回ほど合同で活動している。会員は子どもが少しずつ増えてきている。
- ・文化祭の反省会で、地元の小中学生が来る演出ができないか、活動を見てもらうことや作品を出してもらうことで交流できれば若い世代に文化を伝えていくことができるのではないかと話している。
- ・中学校の生徒と町内会の大人との交流で、防災上の観点から、緊急時に地元の井戸を使えるようにしたいとつるべの使い方を実習し、30分くらいで使えるようになった。また、竹とんぼを作り、学校では教えないナイフの使い方を教え、好評だった。
- ・中学校の美術の授業で陶芸をやった。一学年の生徒に教えるのは人数が多くて大変で1年でやめた。もうやりたくないがクラブ活動での人数なら手伝えると思う。
- ・子どもと接する場があればいい。音楽の先生も一緒にコーラスをすとか。
- ・利用者グループ協議会で日本舞踊の活動をしている。高齢者が多くなったが、子どもにもやってみたいと小学校で活動した。今後、どのように協力したらよいかと思っている。
- ・文化祭の体験学習で生キャラメル作りなどおとなも子ども楽しめる内容だと参加しやすい。文化祭のステージ発表で子どもにも参加してもらった。学校の子どもの関わりは普段はないが、どこかで協力を考えていきたい。

8 学習活動の還元などについて

- ・高齢者が多いので、市で講師を養成して、町内会館等を使って地域の高齢者がサークル学習できる体制を作ってはどうか。
- ・公民館では長期に活動している人が多い。コーディネーターがいると、活動が広がって実る。例えば学校との連携がある。私のサークルは、小学校の理科の授業を支援し、大楠山エコミュージアムという活動をしている。野外で学んだことは良く覚えると先生に言われた。地域の人が学校に入ると、子どもに刺激になる。授業で使える知識を公民館で身につけることができるとよい。公民館でそのような人を育てる講座が必要では。
- ・公民館では趣味活動をしているからこそ楽しい。中には指導者になるような人もいると

思うが、現在のレベルで何ができるかを考えるほうが現実的だと思う。

- ・私たちはコースで施設の慰問をしている。誰かの上に立つということは考えていない。楽しんでもらいたい。

9 公民館の名称や所管などについて

- ・高齢者も多いため、コミュニティセンターと言にくい。市民の意見により決まった名称だとしても公民館のほうがよかった。
- ・名称は公民館のままが良かった。片仮名ではなく、漢字の方がわかりやすい。
- ・学習の場なので教育委員会の方が良いと思う。
- ・教育委員会でやるべきだと思う。専門家がいるのに人材がもっていない。人材の活かし方ができるはず。今も公民館と呼んでいる。

10 その他

- ・定年後に男性がサークル参加を考えても、すでにレベルが高く、女性が多く男性は参加しにくい。そういう男性を表に出すには学習機会をたくさん用意することだ。アカデミックな講座を行うと定年退職した男性は参加しやすい。男性の肩を押すようなことを行政に行ってもらいたい。男性は地域に仲間がいないため、地域に出るには勇気がある。地域にはすばらしい方がいるので、そういう方を講師にして、サロン風なものがあるとよい。大学の講座よりも少しくだけた内容がよい。サイエンスカフェなどでは、連れて行く男性はよい話が聴けるし、飲めると興味を持つ。このようなことを行うとどうしたら地域に出られるかを考えている男性は一步前へ出られる。
- ・グループを作り年限が立つと、高齢化し、ある程度の技術レベルになる。仲良しグループともなるため、排他的にしなくても新しい人は入りにくい。サークルが体験講座を何回も行い、行政が募集しないと参加できない。いくつもグループを立ち上げる必要がある。
- ・大津、久里浜、追浜とコミセンを利用したが、あり方が統一されていない。
- ・調理講習室の物品補充がうまくできるようにしてほしい。バザーの売上を社協に寄付したが、残りの金でコミセンに大きな鍋を寄付した。
- ・事業のチラシは2月前くらいには配布してもらいたい。また、広報よこすかお知らせ版の緑色の字は読みにくい。
- ・基本的に横須賀市民、在勤、在学者ということだが、他の市の人もサークルに加入して

いる。逆に他の市のサークルに加入しようとしてもだめといわれる。他都市と交流を図る視点から、行政は他都市に働きかけて改善してほしい。

- 活動、歴史、生活様式などは、地域ごとに違うため、それぞれにあったシステムが必要。行政は型にはめてほしくない。
- 浦賀文化センターは、文化資産が多い浦賀には、常設展示できる施設が必要との考えでつくられた。行政は、他の学習施設と同じとは考えないでほしい。
- 地域の文化を小中学生に伝える教育をしてほしい。行政が名称や地名を変えてしまうため、子ども達も自分の生まれ育ったまちのことを知らない。親も教えない、地名も新しく変わり、忘れられてしまう。町名など、文化を残すことに対し、生涯学習も協力してもらいたい。
- 以前住んでいた市で、図書館からクラシックのCDを借りていた。最初は好きではなかったが、興味を持ちコンサートにも行くようになった。CDやビデオも中央図書館以外の図書館・図書室でも借りられるようになるとよい。図書室になくても、予約して、図書館から取り寄せられたらよい。
- 家庭教育学級を受講後、生涯学習の講座を受講している。図書室ではDVDの貸出がない。手話サークルに入っているが、高齢者ばかりだ。DVDと機材が借りられたら良いと思う。

(7) 図書館ボランティア関連団体

日 時 平成 22 年 2 月 12 日 (金) 午前 10 時 30 分から午前 11 時 30 分

会 場 児童図書館

テーマ 本市の図書館について

1 図書館での活動などについて

- ・児童図書館では、子ども向けのイベントをよく実施しているが、中央図書館では、映画などはあるが、子ども向けのイベントはあまりない印象がある。
- ・行事を行った場合に、宣伝が行き届かない場合がある。せっかく計画を立ててくれても、集まりにくいという場合もあるので、実施する場合は、もっと PR した方がよい。
- ・作家の誕生日など（例：去年は太宰治の生誕 100 年など）があり、その際には関係する本などを図書館で展示していたりするが、そのときに、同時に朗読のイベントも行いたい。
- ・そういった図書の展示に合わせた朗読について、大分前になるが、図書館に提案したことがあるが、当時は、大変であるということで断れたことがある。
- ・他都市の図書館だと、大人向けの読書会などもやっていて、太宰治などに関する催しや本の展示も行っていたりする。横須賀でもそのような催しをやってほしいと思う。
- ・子どものためのおはなし会を図書館でやっているが、一番の問題は子どもが来てくれないこと。ボランティアは、2ヶ月前から準備をして、練習をして、臨むが、子どもの数が少なく大変残念である。どうしたら子ども達が来てくれるかということが、私たちの最大の課題であり、図書館側でも考えて、日にちや時間を変えるなど工夫はしているが、この時間には、習い事や塾もあるらしく難しい。どうしたらいいか問題になっている。

2 学校での活動などについて

- ・他都市の中学校に、中学生への絵本の読み聞かせに行った。中学生が絵本なんて興味を持ってくれるだろうかとも思ったが、中学生にもふさわしい内容のあるもので、十分に喜んでもらえたと思っている。
- ・中学校については、小学校よりもレベルが高くないといけなかつたかと思つたが、小学校の高学年くらいのもので十分であつた。

- ・中学生への読み聞かせの際には、素話（*絵本や紙芝居の道具を使わず、本を読み聞かせること）を混ぜ、ブックトークも充実させた形で行った。
- ・小学校でも、保護者が行って朝読書をする以外に、何分朝の時間を読書しているとか、読書を奨励している所も多い。
- ・小学校でも国語に古文が入るということで、古典をどう読むか、おはなし会のなかで出来たらということで依頼があり、行った。朗読を聞くのも、話を聞くのも同じで、子どもたちがそれによっていかにイメージを描けるかだと思う。これからはおはなしだけ、絵本だけではなくて、児童図書で子ども向きのもなども、長さの制限はあるが大丈夫だと思うので、行っていきたい。
- ・私の所属するボランティアグループでは、小学校へのおはなし会について、毎年5校行っている。
- ・中学校の図書部には伺って話をしたことなどもある。
- ・最近、ゆとり教育の反省で、朝読書がなくなると聞いている。そこを削られるというのは残念である。だいぶ定着してきていたが、ゆとりがないということで、今年からなくなりましたが、子どもたちはすごく楽しみにしていた。私たちも1カ月に1度は行っていて、極力季節や行事とかに関するものを一生懸命考えて、朝15分くらいで実施していたが、本当に残念に思う。
- ・ゆとり教育がなくなり、今度読書科を設けるような取り組みを行う自治体もあるというような話を聞いたが、横須賀市ではどうするのか。
(⇒学校図書室の充実や今後どうしていったらいいのかという議論は進めているが、横須賀市で読書科のような形で、位置付けてやろうということは考えていない。)
- ・テレビのニュースで、学力テストの結果が良いところを調べてみると、本の読み聞かせや読書量、家庭で新聞を読む、そういう文字に親しんでいるところが、良い結果が出たという話を聞いた。読書科を設けるというような話は、そういう部分で読書というのを位置付けているかなという気がする。活字離れというところから結びついているのではないか。
- ・横須賀市としても、学力の捉え方の範囲を狭くしないで、大きく捉えて、市独自の取り組みをお願いしたい。
- ・ベースのミドルスクールの日本語教育の時間で、日本の昔話の紙芝居を行ったが、絵だけでかなり理解する。見学にくる先生などもいて、どういう風に子どもたちが見ているのかを聞かれたりもした。

3 学校図書館（学校の図書室）について

- ・ボランティアで横須賀市の小学校に行っており、授業時間におはなし会をしているが、その時に、ブックトークといって、何冊か本を持って行って、本の紹介などを行っている。大体の場合は、図書館で借りていった本を持って行って、こんながありますよ、関連した本もこういうのがあるので、どんどん読んでいきましょうという話をするが、出来たらそういった本が学校にあるといい。行く際に、こういう本をこれからおはなし会のときに紹介しますので、学校の図書室にありますかと聞くが、ほとんどの場合はない。学校の図書室がもっと充実するとよい。
- ・図書室については、学校によって差があり、先生の意識の違いなども感じる。すごく熱心な学校は教室に本棚があり、学年の子どもに合う本が取り揃えてある。私たちが行って、紹介した本が教室にあるよと児童に言われた場合などは本当にうれしい。
- ・図書室の充実は、現場の先生だけでは解決しないので、教育委員会との連携で考えてほしい。
- ・学校も過渡期で、閉校になる学校もあって、そういう所では、閉校になるという問題があるので、落ち着いてからでないと図書まで考えられないのかと思っている。
- ・学校図書館は、市で学校規模に応じて予算が配分されるので、小さい学校・大きい学校、先生の意識によって、図書室の充実が、違っているということはあまりないのではないかと私は思っている。
- ・司書教諭も専任ではなく、兼任なので大変な様子である。
- ・週5日制で色々忙しくなったなかで、自分の担任するクラスのほかに大仕事を抱えるというと本当に大変だと思う。専任の司書教諭を配置してほしいということを、長年要望しているが、人を1人配置することを実現するのは大変である。1校1人でなくてもよく、広域・ブロックなどで1人でもよいので配置して、ボランティアとの話ができたりすると、もっと浸透してくると思う。そこで核ができると、子どもの関心も違う。図書室もしっかりと運営する方がいるといたないのでは大きく違うと思う。
- ・横須賀市の読書人口を増やしていき、レベルアップしていくには、子どものことから始めないといけない。大人を今すぐという訳にはいかないの、子どもたちから本に親しむという生活習慣みたいなものを養っていくこと。それには、司書教諭を何人か、大きな枠から1人ずつでも置いていっていただくと全体が半歩でも上がるのではないかと気がする。そうすると児童図書館との方が連絡をとって、新しい本が配架された情報な

ども伝わる。そういう話を実際に子どもに伝える人がいたら違うと思う。どこの自治体も財政的には厳しいので、今ではなくても、遠くをみながら、そういうものを目指して、横須賀の大きな将来を作っていくということが必要だと思う。

- ・学校の図書ボランティアとの連携については、本の一覧表を作って渡したりしており、参考にしてくれていたりする。
- ・学校図書館のボランティア団体を対象に講座を行い、図書館で行っていることなどについて話したが、参考にさせていただき、今も続けてられているということは聞いている。
- ・小学校で立ち上げた学校図書のボランティアのメンバーが、ブックスタートで活動しているメンバーでもあったので、おはなし会をやってくださいということで依頼されて実施するなど、連携は密にとっている。

4 ハード面について

- ・一番の要望としては、西地区に図書館を作ってほしい。本を読みたい人・子どもというのは統計的に見るとかなりいて、利用度は高いと思うのですが、なかなか実現に至らない。何年も要望しているが、なかなか西地区にできないということは、市政としても、税金を公平に使うという点から考えても甚だおかしいと思う。サービス面では、少しずつは改善していただいている、配本は1日おきになっているなど、0から比べればよくなっているが、図書館がないことは致命的。検索すればいいともいわれるが、検索と手にとってみるのでは全く違うので、本が手にとれない状況にあるということから、改善していただきたい。図書館の空白地帯ということは、市の方もよく分っていると思う。予算の面でなかなか実現しない状況だとは思いますが、是非実現してほしい。
- ・中央図書館に通っていくのに、一番の問題となるのが坂。高齢になるにしたがって、上っていくのが大変である。
- ・児童図書館は、立地がよいが、通ってくるのは近所の子だけである。ブックスタートという赤ちゃんに本を手渡す行事のときなども、図書館でおはなし会があるからということをお話すが、電車を使うとなると不便なのかもしれない。
- ・南図書館の場合などは、かなり遠くの人も集まってきて、親子合わせると80人を超えることもあり、すごく狭い。手遊びや童歌などを行うが、少し座って赤ちゃんを抱っこするスペースしかない。足を出して、膝の上に乗せて、遊びなどをする余裕がないので、もっとスペースが必要である。
- ・児童図書館は、建物の狭さがやはりネックである。他市などで、山がない所だと、スペ

ースが広くとれている図書館もある。横須賀は地形上難しいが、もっとゆったり感がほしい。今の児童図書館は、入っても本の棚ばかりで、座ってゆっくり本を読むなどのスペースがない。

- ・新しい図書館ができる計画があった際には、ゆったりしたスペースという部分も希望していた。将来新しいものが出来る際にはぜひ希望する。
- ・児童図書館が大人と離れているというのは非常にいいと思う。大人と一緒にいるところでは、子どもを静かにという親の意識が強すぎる。児童図書館で見ていると子どもも父親も母親も自由に声を出しているの、ブックスタートのときなどにこの図書館を推薦している。
- ・北図書館は、1階が全部子ども用になっていて、かなりゆったりしたスペースがあり、2階は少し狭いが大人用で、上手い具合になっている。親子などでも一緒に来やすい。

5 その他

- ・今年、国民読書年なので、何かしてくれるかなと期待している。市としてこの読書年にこれを目玉にやっていくということ、これまでにないようなものを横須賀として打ち出してほしいと思う。
- ・横須賀市は、ブックスタートなどは割合と早く取り組み、徐々に効果は上がっているのではないと思う。実際にブックスタートに参加してみて、自分が子育てするときに3カ月の子に本を読もうなどということは夢にも思わなかったが、赤ちゃんが絵本に反応し、じっとしようとする、聞こうとするということが分かる。またそれ以上に、母親の啓発になるということを感じた。母親がすごく熱心で、こんな風に子どもが聞いている、見ているのだ、というところを発見する。そういう点では、ブックスタートは、子どもが本に関心を示す以上に、親も関心を示してくれる。ブックスタートに来た母親は、赤ちゃんを連れて、おはなし会にもよく参加してくれる。これは目に見えて素晴らしいことだと思っている。
- ・2、3才でも、毎週読み聞かせを聞いている子は、他所の2・3才に比べて、かなり大きい子の絵本でも理解しており、読み聞かせによって、理解度が進むという印象を受けた。
- ・電子読書が進むと読書の流れが変わってくる。
- ・電子読書の話などを聞くと、本を読むということが一体どういうことか考えさせられる。
- ・今年、NHKの大河ドラマで坂本龍馬を取り上げているが、横須賀は開国の地なのだか

ら、もっとアピールした方がいい。浦賀も江戸時代に栄えたし、小栗上野介なども関わりがある。横須賀市は静か、他市などはもっとアピールしている。横須賀の人はもっと自分の土地を自慢してもいいと思う。もちろん、図書館で、横須賀の人物を披露したり、博物館にもペリーの手紙なども並んでいたりと、足を運ぶ人もいるとは思いますが、もっとアピールした方がいい。

- ・郷土史家で有名な方などもいて、熱心にアピールしている。
- ・江戸時代から学ぶことは今も非常に多い。図書館協議会の集まりで、地域に根差すということを基本において、ボランティアのおはなしや読みものを選ぶときにも、そこを軸に据えてやっているという話を聞いた。それは大事だと思う。中心部から離れている所に住んでいるが、やはり、江戸時代を引きずっているような所もあるので、おはなし会などする際には、今の子どもたちに地域に残っている伝説などを必ず毎年入れるようにしている。子どもは昔話とか伝説というのは他にあるものだという感覚があるので、地域のこと、横須賀市にある色々な昔からの言い伝えとか歴史とか、方言とか入れながら、子ども達に知らせていきたいなという願いをもってやっている。横須賀市としても、ご当地というのをPRするなかで、横須賀市の新しく入ってきた部分だけではなくて、歴史の間に埋もれているような歴史もPRしてほしい。突出した人物にだけスポットがあたるというのが今の風潮だが、同じ時代に生きていた横須賀の人はどうだったのかというような視点も子どもたちに持たせていきたいなと思っている。
- ・やはり教育費にもっとお金をかけていいと思う。

(8) 横須賀市スポーツ振興審議会

日 時 平成 22 年 3 月 29 日 (月) 午後 2 時から午後 4 時

会 場 横須賀市役所 正庁

テーマ 本市のスポーツ振興の在り方について

1 指導者の育成などについて

- ・子どもは、小学校の頃は、指導者やクラブがあって希望してくるが、中学校で、希望する生徒が多いなかで部活動の指導者がいない問題にぶつかってしまうことがある。指導者の育成を組織として取り組んでいかななくてはいけない。
- ・体操競技の普及、指導者の競技会、指導者の育成などを行っているが、指導者が資格を取ってもなかなか活動の場が充実できないということが大変残念である。また、育成した種目協会も自分達で育ててもなかなかバックアップできていない。昔、競技を行っていた人が、普及の方へ移って行おうと思っても、場所がない、活用の場がない、ということで、地域スポーツの普及の場が少なくなっていることが残念である。
- ・普及、部活への派遣に関して、指導者の育成がとても大事だと思う。特に、種目協会では、国体や国際大会では、日本体育協会の公認の資格がないと出場できないので、種目協会の方々には、指導者の育成のバックアップを是非行っていただきたいと思う。市もそういう指導者が育った場合は、バックアップしていただきたい。
- ・学校体育は、スポーツの普及にとって大事であるが、指導者が不足している。部活動への指導者派遣について、25 人に限るのではなく、不足しているスポーツがあって、地域要請があれば、そこに行政が支援して行ってほしい。
- ・現在は、Aという中学校に通う子がBという中学校に行くことも可能なので、もう少し広い範囲で考えることができる。子ども達に通える範囲には、指導者がいるというような割り振りができると、学校体育のなかでも、体育振興ができるのではないかと。
- ・部活の指導者ではなくて、部活の顧問がいないという問題がある。指導者はスポーツ課で斡旋しているので、よいと思うが、部活の顧問を出来ない先生が多い。競技とか部活の問題ではない。学級崩壊みたいな現象が部活でも起きているので、そこは中学校体育連盟、小学校体育研究会など、学校で見直していただかなくてはならないという気がしている。
- ・部活の顧問に、専門的な先生がいないということで、市の施策としてその辺の手だても

していただきたい。

- ・体操の話だが、学校の先生で、指導員の資格・コーチなどの資格を取る人が増えてきている。

2 総合型地域スポーツクラブなどについて

- ・先日、体育協会の研修会で、他市での取り組みを見に行った。小学校の体育館を使って、子ども達が、色々なスポーツ活動を一括して、点数制のような方法で、自分で応募してきてやるというような話を聞いた。今、小学校のスポーツ振興のなかでは、ある程度それぞれの指導者がいて、社会体育で、ソフトボールにしろ、サッカーにしろ、バスケットボールにしろ、それぞれの指導者がいて運営されている。子ども達がスポーツをやりたいということで行っているので、受益者負担、会費のような形で運営されているが、学校を使用した色々な策、クラブが出来てくると、もっと参加しやすい形になるのではと思う。
- ・他市のスポーツクラブの事例では、そこを拠点校にしている、学校はほとんど運営を任せてしまっている。時間は、夕方5時～9時まで平日のみで、その代わりにマネジメントをする人が専任でいる。
- ・総合型地域スポーツクラブをやっていこうという気持ちがあれば、少し変わっていくのではないかと。他市の事例ではナイター設備があり、拠点校にするという気持ちもあるのではと思う。夕方5時から行うのであれば、ナイター設備がなければできない。陸上、サッカー、剣道など、色々な競技を回しながら行っているとのことだった。
- ・市民のスポーツ振興を図っていくためには、底辺を広げていかないと頂点も上がってこないのでは、もっと底辺を広げていかなくてはいけない。もっと市民に還っていくような方法で、スポーツを広げていった方がいい。そのためには、一人の人間がずっと一つのスポーツだけをやり続けるのではなく、総合型地域スポーツクラブでなくても、今日は卓球、明日は陸上、明後日はテコンドーというように、色々な種目を行えるような形で広げていかなくてはいけないのではないかと。そのためには場所が必要となるが、横須賀は他の市に比べて、体育・スポーツ施設というのが少ないと思う。例えば、コミュニティセンターなどにしても、横須賀は行政区に1か所程度しかないが、他市では、1小学校校区に1か所ある所もある。その辺でだいぶ違うと思う。
- ・市民の人達が、クラブに入っていなくても、フリーで参加できる場があればいいと思う。なるべくお金がかからないで、健康づくりできるような環境の整備をお願いしたい。

- ・市民体育を考えていったときに、小学校から高等学校まで既に持っている体育館が中心になるが、施設の貸出が、学校ごとになっているところでムダがある感じがしている。総合型地域スポーツクラブの立ち上げも検討してきて、なかなか思うように進まない部分もあるが、西部や南部などで拠点的な学校を決めながら、一元管理をして、空き体育館の調整などをしていくと、もう少し地域的な要望にこたえられるような割り振りが可能かとも思う。有効利用を考えるシステムができあがってくると、市民サービスにも役に立ってくるのではないかと思う。
- ・体育協会でも4、5年前に1度、横須賀アリーナでいくつかの種目のスポーツを同時に開催して、市民も呼び込んで、30分おきくらいに回して、違う種目のスポーツを楽しんでいただくようなことを行った。そういった仕込みをしないと進まない面もあるので、拠点の学校の体育館の開放、総合型地域スポーツクラブ、NPO法人の立ち上げなども考えて、色々なスポーツを行えるようなものが、各地域に出来て、運営がなされていくと、市民のスポーツ振興が進んでいくと思う。地域的な広がりを持ちながら、市民サービスに反映されていけば、スポーツ人口も増えていくのではないか。
- ・Jリーグ立ち上げの時の話を聞いたが、立ち上げ当時あれほど盛り上がるとは考えていなかったが、盛り上がったのは、やはり国民・地域のニーズが大きいということだった。現在頭打ちで、色々な問題を抱えている部分もあるが、やってみなければできないことも色々ある。日本が欧米型のスポーツの振興ということで、総合型地域スポーツクラブ、今まで学校体育に依存してきたところを地域に任せて、スポーツを育てていこうという考え方が益々重要な施策になってくるのではないかと思うので、是非計画のなかに盛り込んでいただきたい。

3 地域でのスポーツ活動などについて

- ・小学生に剣道を教えているが、やはりボランティアでやっているということで、保護者の協力がないと回らない。サークルの場合、まず体育館を調整会議で取る、それから、学校の体育館であれば、夏は草刈りなどもあるし、地域の町内会館や自治会館などでは、催しでお借りすると、暮れの大掃除で動員などがある。そういう話をすると、そういうことがあるなら入らなくていいという保護者も多くて、年々協力してくれる方が減ってきている。サークルの人数が多いときは80人くらいいたので、お願いするのも簡単だったが、今は小学生10人くらいしかいないので、そのなかでお願いするというのは難しく、それなら辞めると言われると、会が成り立たない部分があり、悩んでいる。

- ・小学生の場合は、単種目に限って行うのは逆によくはないと思っているし、スポーツだけに力を入れすぎて、人間形成が置き去りになることもある。ただ試合に勝つということだけでなく、地域とのコミュニケーション、学校とのコミュニケーション、3者で協力してやれるように、学校体育館を借りてサークルを行っている。
- ・各学校の体育振興会では、球技大会・歩こう会・いも掘りなどを企画しながら、町内、学区を中心としながら、子どもからお年寄りまでを誘って、球技スポーツだけがスポーツではないという考え方から色々なものを企画して、人を集めようという考え方で活動している。しかし、スタッフ自身が高年齢化し、自分達が動くのがやっとだという状況もある。体育振興会としては、少子高齢化というなかで、指針、体育振興会の役割を示していただき、47学区が同じような動きをしていけるような形をとっていただけるとありがたい。
- ・体育振興会で催しものを行うときに、中学生・高校生の参加が難しい。学校とは連携を取りながら、選手の派遣をお願いしているが、直前でキャンセル、当日に来ないなどもあり、企画としてもやりにくい部分がある。学校や町内会とも連携をして、イベントをやるといふ広報を一生懸命やって、参加をお願いしているが、なかなか集まらないのが現状である。そういう面でも、47学区が統一した同じような行動がとれたらいいと思う。
- ・教育委員会・スポーツ課が中心となって、インターネットで、各学区の紹介コーナーを設けられれば、各学区がこんな取り組みを行っている、こんな方法でお金を集めているとか、大人や子どももこんなに集まっているよという情報提供ができるので、いいのではと考えている。
- ・体育指導委員は、全市で320人程いて、全市に散らばっている。体育指導委員として話をする、何かやろうとすると、基本的には生涯スポーツ、全員が簡単にどんなところでも、いつでもスポーツになじめるというようなところが、ミッションだと考えている。そうはいっても、自分の得意な種目だけ、自分の地域だけということで、活動していた面があったが、それではまずいだろうということで、市内を6つのブロック分けて、ブロックごとに、情報交換や新しいスポーツに取り組んで行こうという動きを行っていると思っている。そういった動きのなかで、学校開放デーを使って、ニュースポーツの紹介をするなど、体育指導委員としての存在価値をPRしていこうかと思っている。そういった活動を通じて、スポーツ好きな子ども・大人・お年寄りを作った中で、もう少し専門的にやりたい方には、専門的な競技団体への橋渡しを、スポーツ課で行っていただきたい。個々に団体の特色を生かそうとするなかで、連携していくにはスポーツ課の

役割が大きくなっていくし、期待している。

4 スポーツイベントなどについて

- ・10月に指導者協議会が中心となりながら、よこすかスポーツフェスタを行っているが、そういったイベントが、年に1回ではなくて、2回・3回くらい様々な協力を得ながらやれると、市民へのスポーツ振興のきっかけとなっていくのではないかと。（長瀬委員）
- ・市民を巻き込んだスポーツイベントは大変だと思うが、実行委員会のような形で立ち上げて、市民が参加しやすい場所を作っていくと活性化につながるのではないかとと思う。
- ・体育協会は、競技力向上、底辺の拡大、指導者の育成、青少年の健全育成も考えながら活動しているが、市民スポーツ教室などは、有効に使えている種目協会もあるし、使えていない協会もある。また、市民スポーツ教室だけでは足りず、協会でも独自に行っている部分もある。この辺については、予算が苦しいなかだが、調整していただく部分も若干あるのではないかと。

5 施設・設備について

- ・体育館を借りて、バレーボールをやる場合に、横須賀では、体育館のスペースにお金を支払い、用具にもお金を払わなくてはならないが、場所を確保したら、そこでやるスポーツについては用具が用意されていて、それは無料でもいいのではないかとと思う。そうではないから、バレーボールのチームが少し息抜きでバスケットボールをやってみようと思っても追加でお金がかかるので、やらなくなってしまふ。スペースが確保できたら、前半はバレーボール、後半はバスケットボールでもいいのではないかと。行政は、設備について使用料を取る場合に、条例や規則に、例えば、バスケットボール 700円などと書かなくてはいけない。そのため、そこに載っていない競技の設備が拡充されていかない。スポーツは流行りもあるので、条例や規則のなかにも設備の金額を入れないようにすれば、今このスポーツが流行っているからこういう設備・道具を買おうという余裕が出てくると思う。そして、それを一覧表に載せないで、市民に自由に使ってもらう感覚を持っていかなくてはいけないのではないかと。県内他市でもスペースや放送にはお金がかかるが、設備や道具は自由に貸してくれる所もある。例えばインディアカをやりたいときに、インディアカのコートがない、競技人口がそれほどないから市としては用意しないのではなくて、それが例え100人くらいしかいない競技であっても体育館で出来るようにする。また、逆に体育館からこういうスポーツあるけどやってみないかというような取

り組みを行わないと底辺が広がることや多様化というのは進まないと思う。

- ・ 体育協会で毎年市長あてに要望を出しているが、施設や設備の整備については、財政難もあり、厳しい反応である。
- ・ 横須賀のスポーツ環境を見ていくと、周辺の都市と較べて見劣りするところがある。横須賀アリーナは空調設備が整ってきたとはいえ、見るという観点での観覧席の問題がある。また、横須賀市全体では、体育館的な施設が充分でない。また、弓道場が老朽化していたり、50m プールがなかったり、武道館構想が頓挫しているなどの問題もある。不入斗の競技場はまずまずだが、観覧席や本部席は、他市に比べると不十分で、行政的にも施設の面では力を入れていただかないといけない。コミュニティセンターの小体育的施設についても、地域の実情では、スポーツしたいというグループがあっても、なかなか予約が取りきれないところがあり、不足している気がする。体育協会としてももっと充実した施設・設備が欲しいところだと思う。
- ・ 施設・設備の問題は、景気が良くなってこないと手をつけられないのではないかと思う。
- ・ 4つの体育施設が同じレベルではなく、横須賀市で国際大会や全日本の大会を招致するような施設、スポーツの啓発・いいものを見せる観点から、国際大会をやれるように、重点的に何か一つでも作っていくことも必要ではないか。

6 インターネット予約などについて

- ・ インターネットで予約できるようになったが、一方で、これによって、30年・40年地域で一生懸命やってきた人たちでも、1か月に1度も予約が取れないような状況にもなっている。折角、健康づくり・体力づくりに取り組んで、自分の健康は自分で守る、自分の体力は自分で作る、そういう意識が出来て、続いて、健康になったと喜んでいる方達が、機会をなくしてしまっている面もある。予約を取ることはどなたでも平等だが、どうにかなくてはいけない問題だと思う。
- ・ インターネットになって予約が取れるようになった人もいるが、一方で全然とれない人もいる。インターネットでは話し合い、お互い譲り合って、ということができない。
- ・ それから、参加者に横須賀の人がいけば予約がとれるということで、横浜からどんどん入ってきている。その分、地域でせっかく健康づくりをしている人たちが予約をとれない。これは本当に切実な問題であるので、考えていただきたい。
- ・ インターネットが使えない人もいるということが行政としては盲点になっている部分もあるのではないか。

- ・インターネットで予約できるのは便利でいい面もあるが、予約がとれず、毎回場所が違ってくことも多い。大人の場合はそれでも問題ないが、小学生の場合、子どもが迷うということもあり、困っている現状である。

7 計画の策定などについて

- ・今後 11 年間の長期のスパンの教育の計画なので、5 年間くらいすると必ず色々な問題が出てくるので、5 年間くらいでは見直しが必要だと思う。
- ・市の行政や議会がスポーツ振興にどれだけ理解をもってくれるかということが重要である。スポーツは、音楽や芸術と同レベルではまだまだ評価・理解されていない。横須賀市でも、芸術劇場・美術館、それぞれ立派なものが出来ている。教育は、産業のようにすぐに結果は出ない。20 年・30 年先になって、育てた子どもたちが花開くのであって、先の長い話・投資なので、行政・議会に理解をいただけるようにしていかななくてはいけない。スポーツは一つの文化で、これから益々果たす役割が大きくなっていく。子どもの体力の問題、子どもに関わる問題、若者の色々な問題も言われている。高齢化社会で、元気で長生きできる高齢者を今後色々な所でサポートする必要がある、そういう全ての面でスポーツが関わってくる。それを実施していくためには、色々なサポート体制が必要である。
- ・教育委員会としても、様々な方策で、スポーツ予算の獲得に努めていかないといけない。
- ・日本のスポーツ振興については、競技スポーツの強化、市民スポーツの充実という両輪をいかに上手に行っていくか、これは、国・県・市のレベルでも考え方は一緒ではないかと思う。

8 その他

- ・スポーツ振興については、場所と用具、指導者が必要である。
- ・神奈川新聞、タウンニュースなどで、もっと横須賀のスポーツ振興について PR しても良いのではないかと。スポーツ栄光章などでも生徒達の名前が紙面にのれば、大きな励みになる。また、オリンピック選手が地元から出ているということなどももっと新聞報道などで出ればと思う。
- ・クラブの場合、専門的になると、全国などに繋がるということもあり、往々にして指導者が勝ちに走ってしまうが、そうすると子ども達への普及という意味が少なくなってしまう面がある。本市のスポーツ行政は、少し子ども達が気楽に参加できて、体力向上に

つながるような取り組みができるといい。人的・予算的なものも必要にはなってきてしまうが。

- 市でやっているホームタウンチーム、これはいいことだと思うので、もっと充実した内容を行っていただければ、スポーツに参加する子どもたちが増えて、底辺の拡大ということになっていくのかなと考えている。
- スポーツはする人だけではなくて、見る、応援する、支える人が必要で、支える部分にも行政のサポート、予算的な面も含めて、必要がある。
- 意見として出た話には、ハード面でやる部分と今でもソフト面でできる部分の話もある。
- 不入斗運動公園について、土日の駐車場が混雑で大変である。既存の状態のなかでも工夫をすれば、全面的な解決ではなくても、前進するのではないか。